

教職大学院 Newsletter No. 105

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2017.12.25

お水取りと新教育

-連合教職大学院の発足によせて-

奈良女子大学文学部教授 西村 拓生

2018年の春、福井大学を主幹大学として、岐阜聖徳学園大学、奈良女子大学の三大学による連合教職大学院が立ち上がります。私たちもその一角を担い、日本の教師教育の発展深化に参加させていただくことになりました。

なぜ福井と?——この構想を進める際に、しばしば 学内で発せられた問いです。教師教育の世界でこそ高 く評価されている福井大学教職大学院の挑戦ですが、 必ずしも一般に知られているわけではありません。真 面目に答える際には、もちろん学校拠点方式のメリッ トあたりから説明するわけですが、同じ説明を繰り返 していると飽きてきます。で、思いついた戯れ言の一 つが「お水取りコネクション」。

奈良で早春を告げる東大寺二月堂のお水取り。大松明が火の粉を散らしながら舞台をめぐる勇壮な行事で知られますが、その中心は3月12日の深夜に境内の「若狭井」から本尊に供える「お香水」を汲み上げる儀式です。このお香水、名前の通り若狭から来ている(とされている)のです。お水取りほど知られてはいませんが、3月2日、若狭神宮寺で「お水送り」の儀式が行われ、二月堂の観音様に献じる水が谷川に流されます。その水が奈良に湧き出る、ということなのです。古代から1300年続くつながり。ほら、福井と奈良とは深い縁があるでしょう、と。

あるいは、もう少し真面目に「新教育コネクション」。 奈良女子大学といえば、大正新教育の時代から続く附 属小学校の「奈良の学習法」。それを主導した木下竹 次(1872-1946)は福井・勝山の出身でした。他方、 岐阜聖徳学園といえば、木下の次世代でやはり日本の 新教育を代表する実践家・思想家の野村芳兵衛 (1896-1986) が晩年、その女子短期大学で教鞭をとっていたことでも知られています。故郷に戻った野村が主導していた戦後の岐阜の新教育と奈良女の附属小との間に密接な交流があったことも、最近、奈良女子大の大学院生の研究で明らかになりつつあります。福井、岐阜、奈良という三角形は偶然ではなく、日本の教育改革の歴史に根差したものなのですよ、と。

そんな風に考えると愉快にもなりますが、しかし今回の連合教職大学院の発足は、日本の教師教育という大局においても、またそれぞれの大学の未来についても、切実な危機感に裏付けられたものでもあると思います。奈良女子大学に関して言うならば、かつての女子高等師範学校から戦後、一般大学になってからも本学からは多くの優秀な女性教員が輩出しており、私たちは「開放制」教員養成システムの中核を担ってきたちは「開放制」教員養成システムの中核を担ってきたちは「開放制」教員養成システムの中核を担ってきたちは「開放制」教員養成システムの中核を担ってきたちは「開放制」教員を成システムの中で、教職の専門性を高めることが求められる状況の中で、教師はアカデミシャンかエデュケーショナリストか、という古い問いが、あらためて切実になっています。とりわけ初等教育に関しては「目的養成」であることが強く求められ

目次

巻頭言 (1)

マネジメントコースだより (2)

インターンシップ/週間カンファレンス報告(6)

11 月合同カンファレンス報告 (11)

信州ラウンドテーブル報告(14)

長崎ランドテーブル報告(17)

世界授業研究学会(WALS)LSIP 福井プログラム報告(21)

書籍紹介 (27)

研究集会案内(28)

スケジュール・編集後記 (28)

るようになり、私たちのような非教員養成系大学では 幼小の教員養成が年々困難になっています。そのこと は直ちに、附属学校園の存続にも響いてきます。大学 も附属校園も、伝統と実績に安住しているわけにはい かない。日本の学校教育と教師教育に私たちは如何に 寄与できるのかを考えて、前に進まなければならない。 では、どうしたらよいのか。——奈良女子大学にとっ ては、そのための重要な戦略の一つが今回の連合教職 大学院なのです。

連合発足に向けた「見習い」として今年度、何度か 福井に赴きカンファレンスに参加させていただく中 で、福井大学の皆さんが創造してこられた教職大学院 の意義をあらためて痛感しています。私たちの新しい 連合の枠組みが、この福井スタイルが日本の教師教育のメインストリームになっていく契機となりつつ、それぞれの大学の伝統に根差した個性的な教員養成の発展につながれば素敵だな、と思います。後世、この連合が日本の教師教育の歴史の一つの大きな転機だった、と語られることを夢見つつ、来春からの連合教職大学院の仕事に臨みます。

マネジメントコースだより

学習者(院生)の声

学校改革マネジメントコース2年/敦賀市立粟野中学校 岩崎 俊文

学校改革マネジメントコース2年目に入り、ゴールが見えてきた。しかし、私自身はこの2年間でどれだけ成長できたのだろうかと自問自答の日々である。学習者の立場(視点)から、学校改革マネジメントコースの在り方について一石を投じたい。せっかくの機会であるので、胸の内を正直に語りたい。

私自身、大学院で学ぶことに関心がなかったわけではない。大学時代の友人が大学院へ派遣されるとの知らせを聞くたびに、うらやましく感じていた。 そう、自分の中では、もっと自分自身を高めたいとの思いがあった。

そんな中、平成27年12月に敦賀市教育長から 教職大学院へ行かないかとのお話をいただいた。私 の中では、期待が膨らんだ。しかし、福井大学の教 職大学院のことを詳しく知るにつれ、期待が不安に 変わっていった。日々の職務で多忙を極めていた私 にとっては、不安が大きく膨らんでいった。

「省察」という学び

福井大学教職大学院での学びは、「省察」の学びである。実践を語り合う中で自己を振り返り、そしてまた実践につなげていくという学びである。従来の講義形式ではない、まさに学習者主体の学びといえるものである。教え込みや詰め込みで育った私たちの世代から言えば、革新的な学びだと感じた。

例えば、ミドルリーダーコースの方にとってみれば、課題(テーマ)は目の前の子どもであり、日々の授業であり、校務分掌上の職務である。実践を語り、聞き、振り返る中で新たな「プラン」を想起し「アクション」につなげることができる。そこで得られたものをもとに、次の話し合いにつなげることができる。学びと実践とが相互につながり合いながら階層的に深まっていくことができるところが、「省察」による学びの良いところであると捉えている。福井大学教職大学院の学びが実践に基づく学びであることの所以がここにあるのだということが理解できる

しかし、学校改革マネジメントコースに、この学 びが当てはまるのであろうか。「省察」だけで、管 理職養成は可能なのであろうか。

学びの「フレーム」づくり

学校改革マネジメントコースは、管理職養成コースである。マネジメントを通して、学校改革を成し遂げる管理職としての資質能力や力量を養成するコースであると理解している。そう期待してこのコースに入学し、そして学んできた。しかし、「省察」による学びだけでは、管理職養成は成し得ないことを院生の立場から申し上げたい。

昨年、大学院生となった私は、敦賀市立気比中学

校の教務主任を務めていた。教務主任の立場における「省察」による学びは、実践そのものについて考え深めることはできても、マネジメントの視点で学校経営を捉えることはできていなかった。学校におけるマネジメントとはどういうもので、どう働きかけていけばよいのかわからずにいた。もやもやとした心の状態が続いた。翌年、私は管理職になるであろうといわれていたが、管理職としての見方・考え方や管理職としての基礎を身に付けられずにいた。

今年、敦賀市立粟野中学校に新任教頭として着任した。大学院ではM2となった。前年と大きく違うのは、「管理職として」ものを見て、語り、振り返ることができるようになったことである。マネジメントの視点で捉えることができるようになったとしても、「どんなチームを組んだのか」「予算はどれだけだったのか」「関係機関との連携は」など、マネジメントの視点で捉えることができるようになった。つまり、教頭職としてのステージが、自分の見方・考え方を高めたのである。このコースで学ぶ人全員が、その「教頭職のステージに立つ」ということを身に付けることが非常に重要であると考える。つまり管理職

としての学びの「フレーム」づくりが大切であると 考えるのである。

学習者 (院生) からの願い

そのためには、まだ管理職になっておられない方 (新任管理職も)が「管理職の視点」を身に付けら れるような手立てが必要である。私は、福井大学教 職大学院に次のような提案をしたい。

- ・教職大学院の先生方から、マネジメントの基礎 について学ぶ機会を設ける。
- ・一般企業の経営者の方に企業経営についての講義(講話)をしてもらい、マネジメントの考え方の基礎を養う。
- ・歴代の学校管理職経験者の方に講義(講話)を してもらい、管理職としてものの見方・考え方 を培う。

学校改革マネジメントコースの院生が、「福井 大学教職大学院で学んで良かった」という実感を 持つことができるように、是非ご一考いただきた い。

教職大学院という『非日常』

学校改革マネジメントコース2年/金津東小学校 虎尾 茂樹

気が付けば師走。2017年もあと2週間余り。 今月下旬から始まる冬期集中での長期実践報告執 筆に不安と焦りを感じていた矢先、すっかり忘れて いたニュースレター原稿の依頼。当初の提出期限は とっくに過ぎ、「何とか間に合わせます。」と慌て て取り組み始めた。しかし、良いアイデアも浮かば ず、今までのニュースレターをめくってみれば、ど の先生の内容も素晴らしくますます焦り出す。まだ、 長期実践報告も書き始めていないのに…。こうなっ たら腹を決めてとにかく書き出そう。

思い起こせば昨年の4月、ここ福井大学教職大学 院で学校改革マネジメントコース第1期生として の学びが始まった…。

月1回の月間カンファレンスでは、校種や立場の 違う様々な先生方との少人数でのセッションを繰り 返し行ってきた。一人が語る時間は、午前午後を合 わせると毎回1時間以上もあり、はじめのころは何 をどう喋ったらいいのか本当に苦痛であった。しか し、その都度、大学院スタッフのファシリテータの 皆さんが的確な言葉かけをしてくださり、何とか乗 り切ることができた。そして半年を過ぎたころから は、私自身の今までの経験や現在の取り組み、心に 秘めた熱い思いを語ることの楽しさに気付き始めた。 それは、私の拙い話をまるで自分事のように真剣に 聞いてくれること、そのことについて自分の実践や 経験を踏まえ、いろんな視点から本音の意見を聞く ことができるからだ。日々の多忙極まる学校現場で は、そのような時間を持つことは到底できず、私に とっての『非日常』がそこにはあったのだ。その経 験を重ねていくことで、過去の自分を冷静に顧み、 教師として現在の自分がどのようにして醸成されて いったかを気付かさせてくれた。さらに、これから の自分が進むべき方向性についても熟慮することが できた。これぞまさしく、福井大学教職大学院のね らいとする『実践し省察するコミュニティ』ではな いだろうか。私は知らず知らずの内に、この大学院 がねらいとするところを体現していたのだ。まんま としてやられたり…。

そして、ここにはもう一つの『非日常』があった。 それは、理論書や実践書、報告書をじっくりと時間 をかけて読む機会が与えられることだ。教育関連の 雑誌などは普段から手に取りパラパラと読むことは あっても、何百ページにも及ぶ本に正面から対峙す ることはめったにない。しかも大学院スタッフが厳 選したお勧めの書籍を読むことができるのである。 普段から読み慣れていない私にとって本当に苦痛で はあったが、ここでもスタッフから読み進め方のア ドバイスを頂戴し、何とか乗り切ることができた。 その中でも、エティエンヌ・ウェンガー、リチャー ド・マクダーモット, ウィリアム・M・ スナイダー 著の『コミュニティ・オブ・ プラクティス』やピ ーター M センゲ著の『学習する組織』、デボラマイ ヤー著の『学校を変える力』の3書には大きな影響 を受けた。特に1年目の夏に読んだ『コミュニティ・ オブ・プラクティス』では、自分が現在勤務してい る学校での実践とまさしくリンクするところがいく つもあり、理論的な後ろ盾を得たようで、自分自身 の行動に自信と勇気を持つことができた。このこと は学校改善をさらに推し進めていこうとする大きな 推進力になった。これこそが大学院が目指す『理論 と実践の往還』なのだろう。これもまた、身をもっ て体現することができていたのだ。

確かに、様々な校務を抱えながらの大学院での学 びはとてもハードであった。…いや、まだ現在進行 形だが…しかし、ここに来れば普段、味わうことの できない『非日常』を味わうことができるのだ。それは私にとって何よりのご馳走だったかもしれない。この中で私は、様々な人と繋がり、たくさんの本と出会い、そして過去の自分と向き合うことができた。この『非日常』での経験が『日常』の学校現場における様々な取り組みに、勇気と希望を与えてくれたのは紛れもない事実である。いよいよ今月下旬には、長期実践報告を書き上げるための冬季集中という大きな『非日常』が待っている。それは、必ず自分の血となり肉となるおいしいご馳走だと思って臨みたいと考えている。そして、一回りも二回りも大きくなって? 学校現場での実践につなげていけたら幸いである。

最後に、「私が先生になったとき」(作者不詳) の詩の中に、

私が先生になったとき 自分が理想を持たないで 子どもたちにどうして夢が語れるか

という一連がある。現在の混沌とした不確実性の時代だからこそ、私はあえて理想を高く持ち、夢を語りたい。そして、無限の可能性を秘めた子どもたちも、自分の夢を堂々と語り、その夢に向かって全力で取り組んでいって欲しいと願っている。そのために学校として何ができるかを常に自問自答しながら、これからの教員生活を送っていきたいと考えている。

つながり、ささえる

学校改革マネジメントコース M2/三国南小学校 齋藤 実紀夫

今の自分の実践を支えているもの。それは,勤務校の同僚や上司であり,教職大学院で出会ったスタッフの先生,他校の先生・ストレートマスターの院生,ラウンドテーブルで語り合った方々,勤務校の保護者と地域の方々…など実に多くの「人とのつながり」です。また,長期実践研究報告を構想するにあたり新採用のころからの足跡を振り返ると,学校経営の中で担ってきた体育主任や生徒指導などの分掌,道徳や生徒指導・学力向上の研究発表や授業公開…などの実績は,その土台となっていることに気づかされます。そして,1年目に課せられた他校の研究会への参加や教育総合研究所の研修を含め,教職大学院で学ぶように

なってから以前より研修機会を増やして新しい視点や転換点を見つけようとする自分を発見しました。

○教育総合研究所研修講座「総合的な学習の時間-探求的な学習への転換をめざして-」

2016/6/29,講師「鳴門教育大 村川雅弘教授」総合的な学習の時間の年間計画の省察と年間計画の練り直しを繰り返していくカリキュラムマネジメントサイクルについて、いつ(年度末または年度はじめ),誰が(前年度または新年度の教職員)どのように(学年間のつながりがわかる、行事や教科

とのつながりがわかる) など研修する機会を得る ことができました。

○ 東京学芸大附属大泉小研究発表会 2017/1/28

「国際バカロレア(IB)の授業設計の良さを取り 入れたカリキュラムマネジメント」

大泉小学校では、教科の枠組みを越えて活用できる「見方や考え方」について述べている IB の教育プログラム (PYP) の概念 (key concepts)で「深い学び」を具体化するカリキュラム雌ねじ面とに取り組まれていました。「教科の枠を越える」なら、今までも各教科で育んだ力を総合的な学習の時間で生かしてきたが、総合的な学習だけでなく複数の教科学習を同時期に行っていくことで「汎用的な知識内容面と概念でのつながりをもたせていく」ことがポイントとなります。

総合的な学習で教科横断的な探求学習に取り組むことは、これまでにもいろいろな研究や授業をみさせていただく機会もあり、自身でも教科の単元学習と総合的な学習の時間を意識して同時期にすることもありました。今回、東京学芸大附属大泉小で取り組まれている教科 UOI (Unit of inquiry調べ・交流・表現などを含んだ問題解決学習全般を示す探求の単元)は、初めて見せていただく実践であったが、アクティブ・ラーニングやディープ・ラーニングを考えていく上で、良い機会になりました。

自分の研究テーマに直接つながる実践や研究会・研修で、新しい視点や転換点に出会うのは当たり前ですが、おもしろいのは意外なところで影響し合っている実践に自分が気づくことです。平成17~19年度に携わった「全国小学校理科研究大会福井大会」から関わりが深くなった理科教育研究や坂井市委託の理科事業からは、坂井市教員との協働や県教委サイエンス博士派遣事業や北陸電力・原電の理科出前授業、福井CST(コア・サイエンス・ティーチャー)との連携など、「人とのつながり」の重要性を見せつけられます。

○ 理 科 観 察 実 験 指 導 力 向 上 セ ミ ナ ー 2017/8/23 国立天文台(東京都三鷹市)

県小教研理科部会の教員自主研究活動支援事業 で、本セミナーに参加させていただきました。

天体に関する内容をわかりやすく, 興味・関心を 高める指導について, 教材作りや天体の立体映像 視聴を通して研修しました。特に, 国立天文台が 開発した Mitaka というソフトウェアは、新しい視点で天体をとらえることができ、児童の意欲を高める手段として有効だと感じました。太陽系や近傍の恒星・銀河系などの宇宙の階層構造をリアルタイムに可視化でき、地球からの視点だけでなく、地球をロケットで飛び立ち宇宙を自由に移動して様々な観測データや理論的モデルを見ることができるところが優れています。この研修後、坂井地区教員自主研究活動として、理科主任を対象に私が講師となり伝達講習を行いました。Mitaka については、ダウンロードして個人的に利用可能なので、坂井地区内の各小学校に紹介しました。

○坂井市委託授業「わくわく理科ランド」

おもしろ理科実験や理科工作を通して, 児童が 自然事象の「不思議」や「法則」にふれる機会を 増やすことと, 体験活動を通して坂井市内の他校 の児童とふれあうことを目的に坂井市内小学校 5・6年生児童を対象に、毎年8月第1週の平日 (1日目午後…準備,2日目午前…実施)していま す。平成18年、合併によりに坂井市が誕生し、 平成19年度,全小理福井大会を春江西小学校で 開催しました。以前は各町ごとに小教研理科部会 の事業として「植物採集会」や「植物の名前を聞 く会」などを実施していましたが,この合併・全 小理開催の流れの中で児童対象の実験教室を実施 することになりました。当初は「理科実験教室」 として, 平成22年度より「わくらく理科ランド」 と名称を改めました。初回は10コース程度で, 講師はすべて教員、参加児童数は200人弱でし たがその後、「あっとほうむ」の方に1コース担 当していただいたり、福井 CST に補助者として参 加していただいたりしました。しかし、参加児童 数が徐々に増えて300人を超えるようになり, 平成25年度より、「エンゼルランドのエンゼル キャラバン」「県教委のサイエンス博士派遣事業」 「ふくい科学学園」「原電」のかたがたに参加い ただくようになりました。わくわく理科ランドの 今後について, 実験コース担当講師や運営担当教 員に事後アンケートをとり, 事業の練り直しをし ています。

- ・本年度から、新規の講師参加(CST や外部講師 も含め)が活発になり、新しい内容が増えてよい傾 向にある。このような流れを継続したい。
- ・施設のキャパの問題で、これ以上参加児童が増えても対応できるだけのコースを設定することができない。午前・午後の2部制での実施も考えていくことになる。

・もの作りのコースを多くの児童が希望し、内容の難しそうなコースの人数が少なかった。希望に添うことも大切だが、コースをグループ分けして、各コースからから1つずつ選択するなど、希望の取り方を変えていくことも必要である。

教職大学院で学べる期間も残りわずかとなって しまいました(長期実践研究報告という大きなハードルを越さなければなりませんが…)。「語り合 う中で実践をふり返り、新しい視点や転換点を見 つけようとする自分がいる。実践を再構築して課 題を見出し、ちょっとリフレッシュして学校現場 での実践にもどっていく自分がいる。」今回のマ ネジメントコースだよりを書くにあたり、こんな 長ったらしい題名を付けようかとも考えていまし た。最近は、とても長い題名を付けたテレビ番組 や漢字20数文字にも及ぶ会議が多くて、ここま で内容がわからないといけないのかと思うのです が、この題名は福井大学教職大学院での学びの中 で私が一番気に入っているポイントなのです。い よいよ冬季集中講座が迫ってきてリフレッシュし て新年を迎えられるとも思いませんが、長期実践 研究報告をまとめる中で、その実践のさなかに見 えていた景色がカンファレンスや夏季集中講座を 通して違った景色に見え始めたことを表現できれ ばいいなと思っています。

インターンシップ/週間カンファレンス報告

集大成

教職専門性開発コース M2 山上 晃平

今年も後1ヶ月をきり、この教職大学院での学びも残りわずかとなってきた。私にとって、主に学びの土台となったのはインターンシップと木曜カンファレンスである。今振り返ってみると、この2年間あっというまに過ぎていったように感じる。特に M2になってからの1年間は光のような速さで進み、気付いたら年の瀬になってしまっていた。

今年はM2になってからのこの一年、昨年度との大 きく変わったのは、木曜カンファレンスの運営を行 っていくということだった。昨年度の経験をふまえ カンファレンスの学びをどのように展開していくの かを議論し、考えていく。M2それぞれの思いがぶつ かり合い、なかなか上手く議論が進まないこともた くさんあった。会議の雰囲気自体も悪くなることも あった。しかし、昨年度よりもよいものにしたいと いうM2の思いが強かったように今になって思う。私 自身は M1の院生がこの教職大学院での学びという ものを少しでも実感し、それぞれが考えをもって取 り組むことができるようにはどのようにすればいい のか。そして、M2自身がどのように考え、取り組む 姿勢を見せていけばいいのかということを常に考え ながら取り組んできたつもりである。それがどこま で周りに伝わっていたのかは分からないが自分なり

に取り組んできた。この時期になって、徐々にではあるがその運営の方もM1にシフトしていくようになっている。その様子を見ていると彼らもそれぞれに考え、取り組んでいる姿が見られる。我々の取り組みを見て、自分たちで考え、来年度に向けてやっていって欲しいと思う。

今年度のインターンシップの活動は、昨年度より も長期実践記録をふまえての活動になっていたよう に思う。正直、なかなかテーマというものが自分の 中にイメージできないでいる自分がいた。決して、 何も考えないで活動をしてきたわけではないが、自 分の中での軸というものが見えてこないでいたよう に思う。しかし、今年度子どもとの関わりを通して、 見えてくるものがあった。それは、学習に遅れがあ る児童や授業に集中できない児童がどのようにすれ ば集団の中で活躍することができるのかを考えてい きたいということである。インターンとして子ども と関わっていると、個別の支援や休み時間での関わ りなど、その児童に対して一対一で関わることをし やすい。しかし、自分が担任をもつようになった時 に、そういった児童だけに関わっていくということ は困難になっていくだろう。そういったことを考え ていくうちに、教員として何ができるのかをインターンとして、個人的に関わってきたことを踏まえて 検討していきたいと思うようになった。 この教職大学院では様々な人と出会い、様々なことを語り合うことで学びを進めてきた。ここでの経験というものは私にとって、とても大きな財産となっていくに違いない。その学びを残り数カ月で、形にできるように取り組んでいきたいと思う。

新たな発見

教職専門性開発コース2年 北本 瑞穂

M2になり八ヵ月が経とうとしている。4月の頃 は、M2という立場に戸惑うことが多かったが、今 はだんだんと慣れてきて立場に戸惑うということは なくなった。去年は、附属小学校でお世話になり今 年は小学校を移動し中藤小学校に行っている。中藤 小学校は、全校生徒800人を越える大規模校であ る。私が入っている学級の子どもたちは、とても元 気がある。大休みや昼休みになると体育館や外に行 き鬼ごっこをしている。動くことが大好きな子ども たちである。子どもたちといると日々教師という仕 事にやりがいを感じることが多い。教師という仕事 を改めて魅力ある仕事だと感じる。11月に授業実 践を行った。教科は国語で、2時間配当のところを 授業させていただいた。1時間1時間の目標と自分 が1時間の中で深めたいところはどこなのかを考え ながら授業を組み立てていった。予想される子ども の姿を考えながら授業を考えていた。また、グルー プワークを授業の中で入れたかったのでどこの場面 でグループワークを入れるのかやグループワークの 必然性を考えていった。グループワークをした後の 収集のつけた方を私自身が考えて授業に望んだ。授 業をしてみると私が予想していた子どもの反応とは 違うことが多くて戸惑うことが多かった。メンター の授業でいつも同じ子を見るのではなく毎時間違う 子を見ることやグループワークもいろんなグループ の活動をよく見ておくべきだったと感じた。授業の 中で私が予想仕切れなかった子どもの反応が出てき たときの返しの仕方ももっと考えておくべきだった と感じた。教師は子どものことをよく見て授業をす る際も、何通り何百通りの予想される子どもの反応 を予測しなければならないとこの授業を通して感じ た。そうしないと、子どもたちにとって学びのある 授業をすることが中々難しいのではないかと考える。

子どもにとって学びのある授業を作っていくために は常に教師が子どもの反応を見ながら授業を作って いくことや子どもにつねに何が学びなのかを考えい くことが教師にとって大切なことなのではないだろ うか

教師にとって個を見る力も大切だと感じた。一人 一人をよく見ることがとても大切だと感じた。一人 一人できることや頑張りは違う。私は、クラスの子 を集団として見ていた。だから、書くのが遅い子に は声をかけてみんなと同じような速さについて行け るようと思って支援していた。だが、その子にとっ てみんなについて行くということはハードルが高く 私が支援していても途中で嫌になり書くことをやめ てしまうことがあった。その子にとっての頑張りや その子ができることは何かを普段の生活や授業の様 子から見取ることがとても大切あるとメンターの先 生とその子とのやり取りから学んだ。その子にとっ ての頑張りを認めることや一緒に喜ぶことがその子 にとって次への頑張りに繋がっていくのではないだ ろうか。その子がいま一生懸命にできることを教師 が子どもと一緒に考えることや普段の生活や授業か ら見取ることが教師にとって大切なことであると思 う。

「省察」を繰り返して行う実践

教職専門性開発コース1年/福井市至民中学校 渡辺 頑太

福井大学教職大学院(以下 大学院)ではよく「省察」という言葉が使われる。多くの大学教授やスタッフの方々が用いる言葉であるため、我々院生も言葉にすることが多い。しかし、私は「実際どんな時に省察をしているのだろう」「また何を省察しているのだろう」「そもそも省察とはどういう意味なのだろう」と色々なこと常に考えてしまう。この大学院に入りもう12月。長いようで短いこの8ヶ月間を振り返りながら考えていく。

私がこの8か月間を振り返るとやはり実習校であ る至民中学校(以下 至民中)での長期インターン シップが一番多く振り返ることができるだろう。至 民中での私は、大学院生という立場にあるにも関わ らず、中学一年の副担任や陸上部の副顧問という校 務分掌までいただいている。常に授業をするという わけでもないが、生徒から見ると「先生」という少 し変わった存在だ。どちらかというと「教育実習生」 に近いのだろうか今でもわからない。最初はとても 生徒たちの距離の取り方に悩んだ。「教師としての 威厳を見せなくては」や「他の先生と同じように生 徒のためになにかしなくては」と知らない間に重荷 を担いでいたことを思い出す。しかしメンター教員 の「自分がやりやすい方法をすればいい。方法なん ていくらでもある」という言葉に私は重荷を勝手に 担いでいたことに気づかされた。しかしそこからは 「自分のやりやすい方法とは?」という答えのない 方法を常に考える日々の始まりであった。特に考え 込んだのが授業実践であった。

私のようなインターン生は授業をするよりも先生 方の授業を参観させていただく機会のほうが多い。 至民中では4人の数学教師がおり、どの先生の授業 もよく見させていただいている。4人の教師は教え る内容は同じでも全く違う教え方をしている。どの 先生の教え方も現場をあまり知らなかった私にとの た生の教え方も現場をあまり知らなかった私にとの にどれも成功法であると感じてしまった。そのど れも正解に見える授業をみて、自分なりの授業を るのはとてもつらかった。私の2回目の授業実践し てしまった。それは「時間通りに内容を終わらなも は自分の授業の不甲斐なさに授業検討中に涙を はしまった。それは「時間通りに内容を終わらなも くてはいけないという使命感」などいろなもの に押しつぶされたことによるものであった。その時 の授業を受けた生徒はしっかりと私の話を聞いて いなかっただろう。そこで私は初めて授業が生徒 の関係で成り立つことを気づかされた。その授業以降は「どうしたら生徒がわかりやすいのか」「どうしたら生徒が考えてくれるのか」といった生徒ベースの考え方で授業実践に臨んだ。

何回か授業実践を行うなかで、3クラスにおいて 同じ内容の授業を2週にわたってさせていただいた 時があった。福井県は教科での授業が縦持ちである ため、一人の先生が1年間に同じ学年の授業をでき るのは数少ない。これはとても貴重な経験であると 思ったと同時に他の院生や大学教授にも見ていただ こうとお声をかけた。「生徒のためにどうすれば興 味関心を持ってくれるのか」「クラスが違えば同じ 授業でも内容が変わるかもしれない」といったいろ いろな考えをもちながら教材研究を行っていった。 授業では課題を与え「子供たちが考えた意見を発表 する」というパートと「グループになって一つの課 題を乗り越える」パートを考えた。実践を行う中で、 とてもクラスによって同じことをしても進み方が違 ってくることに気づかされた。また、出てくる意見 も生徒によって違うため、生徒の意見をたくさん引 き出す大変さも知れた。生徒の中にはその課題に適 した意見も言う子もいれば、まったく的外れなこと をいう生徒もいる。私自身まったく的外れな意見が 出ることも大切だと考えている。それは聞いている 他の生徒もその意見が的外れであるかどうか考える (アクティブ) からだと私は考える。

少しずつ、少しずつだが授業実践を生徒ベースで考えていく中で「自分のなかでやりやすい方法」が見えてきたのではないのだろうか。私は学部時代まで「答え」を出さなくてはいけないという考えが先行していた。しかし、これが自分のやり方であり一番いい方法と決めつける必要はないであることも重要である。そのことを大学院に入ったことやインターンシップを経験する中で知れたことは自分の中の宝物になったのではないだろうか。

文章の始めに挙げた「省察」に関してお話してこの文章を閉じようとしよう。ストレートマスターである我々院生は木曜カンファレンスにおいてインターンシップにおける振り返りを行っている。これはまさしく「省察」であり、自分の考えと他の院生、大学の先生方と話をする中で次の日から役立てていくための大事な時間だと考える。では他にそのような時間はないのか?そんなことはない。ふとした時

間に生徒のことを考えるのも「省察」であり、今書 いている文章もまた私にとっての「省察」であると 考える。日々考えなえる時間は多いが実践する時間 が少ないのもまたストレートマスターの特徴だ。 日々の「省察」を大事にしながら短い実践をしっか りと取り組んでいきたい。

これまでの学び

教職専門性開発コース1年/福井市中藤小学校 竹本 瑞季

教職大学院では週に3回インターンに行き、週に 1回木曜カンファレンスがある。インターンでは子 どもたちや先生方と過ごすなかで、1学期と比べて子 どもたちが成長したと感じられる場面を見ることが 増えてきたように思う。子どもたちと関わったり授 業を見させていただいたりするなかで、疑問に思っ たことや気になったことはメンターの先生や教職大 学院の先生や院生に聞き、アドバイスをいただくこ ともできる。「先生がどうしてそのような授業をし たのだろう?」という意図についての疑問や「子ど もがこのような行動をとったのはなぜだろうか?」 という疑問は、その場ですぐに分かったり解決した りできるときばかりではないけれど、後から「あの ときのお話はこういうことだったのか」と感じるこ とも多いのだと知った。木曜カンファレンスでは、 他にも「道徳」についてや「ファシリテート」につ いてなど普段から気になってはいてもなかなか自分 からは調べないようなことについて、考えたりする こともしている。

授業づくりでは3年生の算数の「一億までの数10倍した数」に取り組んだ。その授業ではいきなりノートに絵を描いて考えさせてしまい、「難しい」という言葉が子どもたちから聞こえてくる授業となってしまった。いきなりノートに書いて考えるほうがさなく、具体物を実際に操作して考えるほうが子どもたちにとって分かりやすい授業になるのだということが分かった。また、分かりにくい指示になり、何をすればよいのか分からないままになってしまっていた子どもがいたり、子どもたちから予想していなかった意見が出たときに上手く生かすことが顔を思い浮かべながら授業の準備をすることをより大切にしなければならないのだと感じた。

木曜カンファレンスでは、教科の意義について考えることも3ヶ月くらいしている。1つの教科について「なぜこの教科を勉強していくのか」を考えている。私は「国語」という教科の意義について考えているが、これまでにあまり考えてこなかったこと

なのでとても難しい。3ヶ月の間、同じことをする のではなく、「このような資料を読む」と決められ ていてそれを読みながら考えていった。最初は平成 30年の学習指導要領の「国語」について書かれた文 を読み、国語かを通して子どもたちにどんな力をつ けたいと現在考えられているのか見ていった。国語 科において目指す資質・能力はとてもたくさんあり、 どういうところに注目すればよいのかに悩んだ。次 に実践の記録を読み、学習指導要領に書かれている こととあわせてまとめた。授業実践と学習指導要領 は、目標も内容も深く関わりあっているものだとは 思うが、今まで気にしながら見たことはないのだと 気づいた。それからこれまで出された学習指導要領 のうちいくつかの国語科の部分を読み比べて、どの ように変わっていったのか、また変わっていない部 分はどこかなどについて見ていった。昭和23年、昭 和 33 年、平成元年、平成 30 年の学習指導要領を比 べたとき、共通する目標として語彙を増やすことや 文を書けるようになること、進んで読書ができるよ うになることなどがあった。また、変化していった 目標もあるように思った。昭和23年の学習指導要領 では知識・理解を習得し、身につけることが重要と されていたが、昭和33年、平成元年の学習指導要領 になるにつれ子どもたちが学習に取り組む態度を重 視するようになっていき、平成30年の学習指導要領 では知識・理解についても、学習に取り組む態度に ついても同じくらい重要とされていると感じた。他 に年間を通した授業づくりを考えていくため、『ち いちゃんのかげおくり』と総合や行事をつなげ、関 連させた授業をするとどうなるかについても考えた。 そしてこれからの木曜カンファレンスで、最後にま とめとして「なぜ国語科を勉強していかなければな らないのか」について考えていく。これまで考えて きたことや、書き方や考え方などについてアドバイ スをいただいたことから、最初のときよりは書けそ うだが、資料を読んで考える作業をしていたときに その資料について考えるばかりで、「教科の意義を 考えるために読もう」とは思っていなかったのでま

とめてかんがえるのはやはり難しそうだ。どの作業 をしているときも、「何を考えるためにしているの か」を意識しておくことが大切だと感じた。このよ うな普段考えないことを考え、自分なりにまとめる ことにも、これからすこしずつ慣れていきたい。

理論と実践、これまでとこれから

教職専門性開発コース1年/福井市明新小学校 山崎 洸亮

教職大学院に入学してから8ヶ月が経ち、もう1年の3分の1を残すのみとなった。教育現場に入って子どものリアルな姿に長く向き合うこと、職員の一人として学校の中で行動すること、実際に授業をしてみること…。それぞれに発見があってとても楽しいが、8ヶ月を経てもまだわからないことの方が多く、悩みは尽きることがない。「2年後、自分は本当に教壇に立って指導できるのだろうか」と常々不安で仕方がない。

私は現在明新小学校の3年生のクラスに携わらせていただいている。他のインターン生とは違い、1クラスに固定に入るのではなく全4クラスに入り様子を観察している。クラスごとに雰囲気はやはり違っていて、「この子がもしあの先生のクラスだったらどんな風に過ごしているだろう」「この先生だったらあの子に対してどう指導するのだろう」と当てはめて考えてみることも多い。また、様々な先生の指導方法や授業展開を間近で拝見できるので、「じゃあ自分ならどうするのか?」を考えるには絶好の立ち位置にいるのだろう。その中で特によく考えるのは、褒めることと叱ることのタイミングやバランスである。

とある男子児童がトラブルを起こした時に、私は ふいに「先生ならば叱らないといけない」という気 持ちに駆られてしまった。この時、私は威圧的な表 情をあえて作り、「その行動をしたらどうなると思 うか」などの質問を強い口調でしようとした。今考 えてみれば、単に怖がらせようとしていただけだっ たのだろう。毎週木曜日に行われているカンファレ ンスでこの事例を紹介すると、大学院の先生から「あ なたにとって『叱る』ってどんなこと?」「いけな いことを『いけないことだ』と伝えるだけじゃだめ だったの?叱ったらその子には叱られたという記憶 だけが残ってしまうかもしれないよ。」という質問 や助言をいただいた。この出来事の瞬間も、心のど こかで「先生ならば」「叱らないといけない」とい う言葉に自分自身が引っかかっていたため、痛いと ころを突かれたような気持ちになった。

私は大学生の頃に、ある NPO 法人の代表の方にお

世話になっていた。その方は、子どもとの係わりに アドラー心理学などを取り入れた「笑育(しょうい く)」という考え方をお持ちで、中には「褒めない・ 叱らない」という考え方があった。「偉いね」では なく「ありがとう」、「そんなことをして、あなた はいけない子だ!」ではなく「そんなことをされる と私は悲しい」という言葉で伝えていく。褒める・ 叱るは上下関係(支配・被支配)の上に成り立つも ので、相手に感謝や尊敬の感情があれば横の関係で 接することができ、「ありがとう」という言葉が出 てくる。簡単に説明すると、このような考え方であ る。私は大学生の頃にこの考え方に感銘を受け、教 師のスタイルとして取り入れてきたい気持ちでいっ ぱいだった。しかし実際に教育現場に入ってみると、 なかなか実践に結び付かないことも多い。いつ褒め ていつ叱るのか、どのタイミングで声をかけるのか、 そもそも「褒めない・叱らない」の考え方は生かせ るのだろうか…。頭の中でぐるぐるといろんな考え が混ざり合い、どんな風に子ども達と係わっていこ うか、現在も模索中である。

大学では特別支援教育を専攻してきたことから、環 境に生きづらさを抱えた子ども達を見てきたつもり だ。だからこそ、子ども達一人ひとりが「楽しい!」 と思ってもらえるような学校・学級を作りたい。も ちろんこれは学級づくりの面でも、授業の展開でも 言えることである。しかし実際の私は、ちょっかい をかけられて泣きそうになっている子がいるのにも 関わらず、ちょっかいをかけた子に注意もできない 未熟な存在だ。きれいごとを言っているだけの現在 の自分に憤りを感じ、泣いたこともある。理想の教 師に近づけるように、信念に対してまっすぐ正直に、 強く、優しく、前向きに、インターンでの生活を全 うしたい。これまでは時間に置いて行かれたような8 ヶ月だったように思うため、まずは残りの3ヶ月の 日々を1日1日惜しむように、授業実践やカンファ レンスなどを前のめりに取り組んでいきたい。

11 月合同カンファレンス報告

「書きたくない」から始める

池田 丈明 教職専門性開発コース3年

ニュースレター原稿の提出期限に、3年間で初めて、 遅れた。理由は、「書きたくない」と思っていたか らだ。そこで11月の合同カンファレンスの内容を 記す中で、「書きたくない」という思いの真相に迫 ってみたい。

午前は「他校の研究から学び、他校の研究を支え る」というテーマだった。テーブルのほぼ全員、他 校の研究に行っていなかったので、丸岡中学校の林 先生の実践を聞いて、みんなで意見を交わして過ご した。林先生の話は非常に興味深かった。なぜなら 実践から省察し、省察から実践を行うことで、形骸 化しつつあった「慣習」からの脱皮を成功されてい たからだ。それゆえ、「学校作りは学級作りと一緒」 「トップダウンではなく、目の前のことに注目し、 現状を見ることが大切だ」という言葉は、非常に重 みがあった。そして、学級経営や授業の話になり、 より興味深い話が3つあった。1つ目は、座席のこ と。職員室の座席を、企業のようにフリーにするこ とで、職員同士の風通しを良くするアイデアである。 自分が管理職になったらやってみたいと思った。2 つ目は、コミュニティーの作り方のこと。高志高校 の N 先生が、学年会議をわざと職員室の中でやるこ とで他学年も巻きこんだ学校作りができたことが話 題になった。また、丸岡南中では、職員室内での飲 食は禁止されており、飲食用の別室が設けられてい る。それゆえ教師同士の会話の機会が自然に増え、 学校が変わったという例も挙がり、感動した。3つ 目は、学級経営のことである。友達同士仲の良い学 級をつくるために、ある小学校では朝友達の名前が 書かれたボールをとり、その子を 1 日観察し、「よ かったこと」「がんばったこと」を帰りの会で本人 に伝える取り組みをしているそうだ。それにより、 教師なしでクラス会議ができるほど、子供同士が仲 良くなるということだった。こうした事例から、教 師一人一人の思いが小さな実践に変わり、実践の積 み重ねが大きな成果へ繋がることを生の声から知る

ことができた。

午後は、「自分自身の実践の挑戦を語る」という テーマで、院生同士で授業実践における悩みや葛藤、 長期実践報告書の進め方などの話をした。中でも川 崎院生は、自分の見取りや学びが、実際の学校現場 でどのように変容していったかを、非常に客観的に 捉えて分析していた。そこには省察を重ねた川崎院 生の学びの筋があり、今後の展望も描けていた。

このように、最後の合同カンファレンスでは、各 個人が長期実践報告や1年目のまとめに向けた大き な「枠組み」や「変容」を語る機会が多くあった。

ここで、ニュースレター提出が遅れた自分のこと に話を戻す。最後の合同カンファレンスで、私は一 体何を語っただろうか。リーダーの先生や同期・後 **輩院生は、自らの実践をしっかり語れているのに、** 自分は曖昧なまま最後の合同カンファレンスを終え たのではないだろうか。カンファレンスで、きっと 私は色々と喋ったが、自分の「核」にあるものを何 も語れていなかったと思う。「核」とは、自分の信 念であると考えている。その信念を誰かに伝えるた めには、それの形成過程に何があったのかを探り省 察を加え捉え直すことが必要だと思う。その信念や 「核」に近付くことを、私はこれまで避けていたの ではないだろうか。つまり、負の過去を掘り出し自 分で自分を傷つけるかもしれないことに恐怖を感じ ているから、省察することはおろか、ろくに自分を 顧みずに、ずるずると今に至ったのではないか。こ れらの事実が眼前に押し寄せた。しっかりとした省 察ができていない自分に腹立たしくもあり情けなく もあり、結果として今の「書きたくない」の状態を 創り出しているのだと、これ書いている今分かった。

今回、ニュースレターを「書きたくない」と思っ た理由を書くことで、本原稿に換えさせてもらった。 だから私は今、遂に"あること"を始めた。その"あ ること"の内容は、長期実践報告書の中で明らかに する所存である。

11月の月間合同カンファレンスを終えて

学校改革マネジメントコース M2/小浜第二中学校 加福 秀樹

11月は、『他校の研究から学び、他校の研究を 支える』という大テーマのもと、マネジメントコー スは「他校の組織的な取り組みやマネジメントの在 り方からどのように学んできているか」という視点 でカンファレンスが行われた。

小浜市は『授業力アップ研究指定』を平成21年 度から行っており、本年度で9回目を終えた。この 研究は小浜市全体の授業研究として位置づけられて おり、指定校を中心として市内全ての教員の授業力 アップを図る目的で行われている。毎年、市内全教 員が研究指定校の授業づくりに参加し、研究発表当 日は授業参観し、事後研究をしている。この一連の 流れに参加することで、研究指定校の教員だけが研 究し発表するのではなく、市内全教員が研究に関わ り当事者意識を持って学ぶよう意図されている。ま さに小浜市全教員に向けて『他校の研究から学び、 他校の研究を支える』システムが構築されている。 今でこそ「協働」という言葉がよく使われるが、市 教委が『他校の研究から学び、他校の研究を支える』 という視点で、いち早く協働体制を構築してきてい る。これが9年間続いてきたことは大きな財産であ る。今では市全体が互いに学び合い、支え合える体 制になってきている。

特に今年の研究発表は原点回帰の印象があった。 私は第1回目の当時の研究主任であったため、私に はとても懐かしく心地の良い発表会であった。近年、 指定校の独自色が強く出ていたため、今年は研究内 容の軌道修正が図られたように見えた。今回は管理 職が研究指定の内容を吟味し、あるべき姿を再確認 し、市教委の意図に忠実に研修を積み上げたことが 伺える。前教育長や指導主事と連携を密に図り、研 修に何度も参加してもらっていたと聞いている。研 修の質を高め、研究指定のねらいや目的に向かって 正確にアプローチしたことが大きな成果に結びつい たと考えられる。 そう思うと、研究発表会で感じた私の心地の良さは、本を正せば研究指定校の校長のマネジメントの素晴らしさからくるものであると言える。また、冒頭のマネジメントコースの視点で言うと、リーダーが正確に状況を見極め、適切な手立てを講じることの大切さを改めて学ぶことができた。さらに、大局的に別の見方をすると、これは一方で学校間の引き継ぎの難しさを示している。市全体を組織マネジメントの視点から考えた場合、指定校間の引き継ぎを一つの課題として捉えることができた。

気がつけば以上の内容を、最後の11月のカンファレンスで熱く語っていた…。

今回で予定されていた月間カンファレンスが全て終了した。一つ一つが終わっていきホッとした気もあるが、何となく寂しい気がしている。振り返ると多くの先生方の顔が浮かぶ。この間、県内外問わずどれだけ多くの人と出会い、意見や考えを交え合わせてきたことか。

最初は物足りなさや、何を学んでいるのか分からず悶々としていたが、時が経つにつれ省察していくことの気持ちよさを感じられるようになってきた。カンファレンスではまず、インプットした情報を自分なりに解釈し整理する。そして自分の考えと照らし合わせ、そこで生じた違いや疑問を質問したり意見したりする。最終的に自分の考えを再構築しアウトプットする。これらのサイクルを自然な成り行きの中で自分のペースで自分のレベルで行える。そのためコミュニケーションの中でストレスを感じずに自然に学んでいるような気がした。話したり聞いたりする中で、気づきやひらめきながら考えを再構築することが実に楽しく思えた。また、ファシリテーターのさりげない助言から自分の考えが広がったり

深まったりする機会が何度もあった。その度に経験値からの発想の中で這い回っていたところから、一段抜け出せたような気にもなった。この気づきや学びを積み重ねながら、日々の実践と行き来させる手続きが常に繰り返されていた。全て頭の中で行われる地味な作業ではあるが省察と実践を行き来することで、現場での仕事の進め方や考え方にすごく役立った。

最近、カンファレンスを学校に取り入れられないかと思うようになった。このサイクルを現場の先生方同士の中で実現できれば、一人一人の先生方の思考が整理され、より質の高い仕事につながっていくのではないかと思う。自分の思いや考えを人に話せば、ストレス発散になりメンタルへルスにもつながるのではないか。今までに味わったことのない効果

が期待できるような気がしている。昔のように飲み 会で教育を語り合い、教育観を形成する機会が激減 している。若い先生が増えていることもあり、今こ そ校内に擬似的な機会を創出し、研修の在り方その ものを見直す必要があると考えるようになった。そ してこの学び方は、今まさに子どもに求められる学 び方でもあるからだ。教師自身が体感し、この良さ や効果を味わうことが、授業改善の本質へ迫る近道 であるような気もしている。

今になってコミュニティ・オブ・プラクティス(実践コミュニティ)を読んだ意味がボディーブローのように効いてきた。

平成29年11月 教職大学院 報告

学校改革マネジメントコース/大野市陽明中学校 教頭 長谷川 秀樹

午前は「他校の組織的な取り組みやマネジメントの在り方からどのように学んできているか、互いの経験を語り合う」というテーマだった。 ファシリテーターが冨永先生とわかった時から、「今日のこのラウンドは盛り上がりそうだな」と期待感満載で前のめりに臨むことができ、勿論その期待通りの2時間となった。

Tさんから保育園・幼稚園においての公開の難し さが語られた。閉鎖的な傾向があること、個々の保 育者の保育全般に対するプライドが高いこと、公開 の時間帯の設定が難しいこと、保育者の多くが女性 であること、などが要因ではなかろうかというよう な話だった。自分も市教委に勤務していた折、毎年 管轄の幼稚園を訪問することがあったが、上記と似 た傾向を感じずにはいられなかった。当時の保育者 からは、公開保育において一つのミスも許さないり ぶムが悪いために避けるとか、保育内容にダイナミ ックな活動や展開を設定しやすい時期の公開にこだ わるなどということがあった。参観・指導する側か らすれば、スペシャルな一時のみが大事なわけでな く、幼児のリズムが悪い時にこそ、保育者がどんな 言葉がけをしたり、遊びのメニューにバリエーションをもたせるのかとか、シンプルな部屋内での読み聞かせや手作業において、どんな保育の工夫をしているのかなどに関心があり、いわゆる出来映えを求めてはいなかった。ゆえに、舘さんの苦悩はよくわかり、まだまだ意識の改革が必要であると感じ、上記のような話をさせていただいた。ただ、この点は、小中学校においても少なからずあるように思われる。グループとしては、協働の大切さ、立場や経験年数などを超えた話し合いの重要性、外の世界を見ることによる価値観の変容、などが大事であるとの再認識がなされた。まさに月1の大学院の学びがそれである。午後は、「マネジメント実践の取り組み、探究の過程を語り聴き合う」というテーマであった。

I さんからは、この1年半、大学院での学びをもとに職員の意識改革をずっと図ってきたことが詳細に語られた。以前、カンファレンスの参加者全員に対して、そのあたりのお話をされたのを拝聴していたので、だいたいのシチュエーションはスムーズに呑み込めた。自分は勤務校において、これといった変革をとげられないままでいるので、そのバイタリティたるや、すごいものを感じた。午前中のTさんの

話と重ねて、保育園・幼稚園での改革はさぞ困難であったろうと推察する。語りの中に、子どもの視点や保護者の視点を大事にすることで、職員の意識が徐々に変わっていったとあったが、この辺りは自分の勤務校でも同じようなことを感じることがある。日々の学習指導や生徒指導において、「生徒ファースト」ではなく、指導者のやりやすさで、その手法等が決定されていることがしばしば見られる。その結果、生徒の満足度が低かったり、意欲を減退させることになっているように感じる。また、「保護者

感覚」が鈍っていて、配慮のない指導体制や連絡不足に陥り、信頼を揺るがすこともままならない。そういった点からも、この日は、保育園・幼稚園の指導を通して、今までの勤務校での振り返りができる貴重なものとなった。午前に、柳澤先生から「安易に正解を求めない」ことの大切さを教えていただいたが、この午後のグループでも、「誠実に模索していればそのうち必ず光が見えてくる」との一言があり、このスタンスは、ぜひ日頃の勤務においても、心掛けたい。

信州ラウンドテーブル報告

学びの整理、表現、そして更新

教職専門性開発コース1年/福井市中藤小学校 松木 巧

大学院生になって2回目のラウンドテーブル。前回は福井大学で聞き手としての参加だったが、今回は長野で報告者としての参加である。しかもストレートマスターの参加は自分だけ。この状況で私は何を報告すべきなのだろうか考え、インターンとカンファレンスを通して自分の考えが更新されてきたことと、それを踏まえて行った授業実践を報告することにした。

私のグループは教師や教育センターの方などの学校教育関係者と、企業の経営者で構成されていた。 この経営者の宮下さんからいただいた2つの意見が 私には印象的だった。

1つ目は、特別支援の必要な子どもが社会に出た 後、受け入れる企業と担当した教師との関わりが欲 しいという意見だ。その人の強みが何なのか、どの ようにしてコミュニケーションを取ればよいのかな ど、受け入れる側も受け入れる態勢をつくりたいと のことだった。今インターンをさせていただいてい るのが小学校だということもあり、関わっている子 どもの就職後についてはあまり考えていなかった。 それと同時に、支援の中で子どもたちの強みをあま り見つけられていないことにも気づかされた。これ より、今後は子どもたちが社会に出るうえでの強み を探せるような関わりをしていきたいと考えた。また、特別支援を受けていた人がどのような強みを生かして、どのような人との関わりの中で働いているのか知りたくなった。

2つ目は、考えることをシンプルにした方が行動 しやすいということだ。これは、計画的・客観的に 子どもを育てるアセスメントと、寄り添って共に歩 く子ども理解は違うという教育センターの小町谷先 生の指摘から、私が客観的になり過ぎているのでは ないかという話になったときにいただいた意見だ。 最近のインターンを振り返ると、子ども同士の関わ りに目を向けがちで、自分自身が子どもと関わる機 会が以前より少なくなっているのではないかと考え た。これより、客観的に考えることより関わりの機 会を優先し、子どもの気持ちに寄り添う機会を増や したいと考えた。そうすることで、その子の強みを 見つけることにつなげていきたい。

初めて参加した他県のラウンドテーブルだったが、 自身の学びを新たな視点で捉え直すことができ、と ても意味のある時間を過ごすことができた。学外の 様々な人と話し合って自身の学びを整理し、表現す ることを通して更新できるラウンドテーブルのよさ を改めて実感したよい1日だった。

信州紀行

~信州ラウンドテーブル&プラスα~

ジルリーダー養成コースM2/奈良女子大学附属中等教育学校 永曽 義子

各地ラウンドテーブルの案内があった時、こんな チャンスはもう今年しかない。是非どこかのラウン ドテーブルに参加したいと考えた。昨年度は他の仕 事と重なったり、まだ来年もあるかという思いもあ ったりした。信州ラウンドに決まってから、もう一 つ、大きなチャンスが飛び込んできた!伊那小学校 への訪問である。

ラウンドテーブルは、こんな巡り合わせもあるのかと思うくらい、毎回毎回奇跡的な出会いがあり、今度はどんな出会いがあるのかと楽しみにしていたところ、何と、大きなおまけがついてきた。伊那小学校への訪問のお誘いがあったのだ。当日まで、子どもが何日も前から遠足を楽しみにするかのように、私の心もワクワクしていた。

と、前置きはさておき10月13日は伊那小学校へ。 駅から少し歩き出すと動物のにおいがしてくる。小 学校が近づいてきたんだと胸が高まった。小学校に 着くなり、2月の福井ラウンドテーブルで同じテーブ ルになった安田先生と昇降口で出くわす。これまた 何という奇跡。「先生、シルちゃんは元気ですか?」 「ああ、元気元気。これからシルちゃんのところへ 行くよ。」「ああよかった!」シルちゃんは、安田 先生のクラスで飼っている馬のシルフィードのこと。 2月のラウンドテーブルではその報告があった。シル ちゃんは年齢的に弱ってきていて、安田先生は子ど もたちにそのことを切り出せずに悩んでおられたの だが、クラスの子どもたちはちゃんと受け止めてく れたことを『子どもを信じる』というタイトルで報 告されたのだった。あれからシルちゃんは元気に過 ごしているのかずっと気になっていた。ああよかっ た!と胸をなでおろす。校舎内に入りご挨拶をして から、早速「ともがき広場」へ案内してもらい、シ ルちゃんとのご対面を果たすことができた。安田先 生が報告された時の印象とは異なり、とても元気そ うに見えた。その他ヒツジやヤギやいろんなクラス の動物たちに出会ってから、教室の方に向かった。 まず案内していただいた2年生の教室は、真ん中に 大きな水槽を設置してコイを飼っている。その水槽 を囲んで水槽に向かって子どもたちが座るというこ れまでに見たこともない教室の配置だった。授業の 始めにクラスの歌を2曲、全員大合唱で全身を使っ て歌い、テンションが大いに盛り上がったところで、 その時間は話し合いが行われた。子どもたちは一瞬 にして静かに話し合いモードになり、けじめのつい

ている様子に感心した。その時間は、水槽でコイを このまま飼っていたのでは死んでしまうコイも出て くるので、外の池(第1池と第2池がある)に放流 する方がいいのか、池にいるニジマスに食べられな いようどのようにして放流するといいかを一生懸命 話し合っていた。次の時間は3年生の教室に案内し ていただいた。教室に行くまでの廊下の窓から、子 どもたちが作ったウズラを飼うための小屋が見えた。 クラスでは、段ボール箱をくり抜いて作った巣の中 でウズラを飼っていた。ウズラが大きく育ってきた ので、外の小屋に移すのだということがわかった。 クラスでは6羽のウズラを飼い始めたのだが、途中 で1羽がなくなり5羽になっている。その経験から 命の大切さやはかなさ、思いやる気持ち、またウズ ラを飼うことによってクラス集団としての結びつき が深まったことなど、多くのことを学び、その気持 ちを歌にしようとみんなで歌詞を作っている最中だ った。素敵な歌詞が少しずつ出来上がりつつあった が、途中で歌詞作りに積極的に取り組んでいない子 どももいるため、クラスの気持ちが1つになって歌 詞ができるよう担任の先生は気持ちを引き締めよう とされていた。どちらのクラスも、話し合いの途中 で退室することになり、その後どんな結論になった のか、どんな歌が出来上がったのか、また聞いてみ たいと思う。廊下を歩いていても、どのクラスも大 変落ち着いて静かに学習できていた。小学校と言え ば、いつも元気いっぱいの子どもの声が鳴り響いて いるのかと思っていた。授業中でも集中できずに、 もっとがさがさしている子や授業に関係ないことを しゃべったり、立ち歩いたりする子もいるのだろう という先入観があったが、全く違っていた。学校全 体がどっしりと地域に根付いているのだろうと思わ ずにいられなかった。先生に対しても学校に対して も、子どもや保護者や地域から大きな信頼があり、 それがどっしりと学校を支えているのかなと感じた。 校庭に植えられた多くの大木も、学校の歴史と伝統 を感じさせどっしりと根付いて学校を支えていた。 何年も前の昭和の頃、私が小学生だった時代に少し タイムスリップしたような気分になり、心軽く学校 を後にした。伊那から長野までの移動は、同じ県内 とは言え電車で約3時間もかかり、やっと長野につ いた時には、充分目的を果たしたような気分に浸っ ていた。しかし翌日は、より一層濃密な一日となっ たのである。

10月14日、信州大学附属長野中学校は、広い敷地 内に小学校と特別支援学校も併設された落ち着いた 雰囲気の学校であった。外はコンクリートであるが、 校舎内に入ると木造の壁が温かい空気を感じた。開 会行事の体育館では、参加者 250 名を超える程の盛 況ぶりに見えたが、参加者一覧表を見ると学校関係 者は8~9割が信州大学附属関係者で、その他はほ ぼ県内の学校からの参加であり、奈良からやってき た私なんかは異色のメンバーであった。まず基調講 演は、福井大学松木健一先生を講師に『教師の職能 成長に果たすラウンドテーブルの役割』というテー マの講演である。新学習指導要領がめざす子どもに 必要とされる資質・能力は、従来の学習活動によっ て習得した知識・技能をいかに活用し発展させてい くことができるのか、見えにくい能力であり、学習 活動のプロセス等で間接的に培われる力である。こ の子どもの学びの構造は、教師の学びとフラクタル な構造をなしている。教師も知識・技能の習得にと どまらず、資質・能力を培うための研修が必要であ り、ラウンドテーブルがその役割を果たす。自己の 長期に渡る実践の物語を、異質なメンバー同士で共 有できるところまで掘り下げて語り合うことから、 自己の教育的価値観の問い直しに繋がるというお話 から、異質な自分がこの信州ラウンドに参加するこ とに意味があるのだと感じ、ほっとしたのだった。 次に4つの ZONE に分かれ、私は ZONE 3 『これか らの時代に求められる能力とは』に参加した。長野 県中小企業家同友会の方々と共にグループ討議を行 った。地域の中小企業の社長・会長・取締役・専務 などといった方々が、グループ内に2名ずつおられ、 計16のグループが作られていた。企業家と教師とが、 子どもたちの未来について熱く語り合うという試み は初めての体験でとても新鮮であった。地域の企業 には子どもたちの保護者が働いている。企業がしっ かりと社員教育をして、しっかりと家庭教育をして もらい、しっかりと学校教育をしていくという3者 の関係が、子どもの未来を作っていくという企業の 方からの話があり、ここでも福井同様、地域で地域 の子どもたちを育てていこうとする地域性があるの だと感じた。

いよいよラウンドテーブルである。ランチミーティングも午後からのテーブルと同じメンバーで、自己紹介をしながらのランチタイムである。報告は私から始まった。福井ラウンドテーブルでもいつもこのテーマになってしまうのだが、『学校設定科目コロキウムの実践』である。同テーブルのメンバーは、小学校の先生2名と特別支援学校の先生、長野県中小企業家同友会の方で、私の高校2年生の実践報告は、小学校の先生方にとっては想像しがたい理解しがたいところが多かったと思う。いろいろ出た質問に対して、実践してきたことを思い出しながら説明を加えた。その話をしながら、これまでの実践を意

味づけしていると感じる自分がいた。これは朝の松 木先生のお話の通りだった。ラウンドテーブルでの 語り合いは、異質なメンバー同士で共有できるとこ ろまで掘り下げて語り合うことから、自己の教育的 価値観の問い直しに繋がる。全くその通りだと実感 した。その後、拠点校方式の信州大学教職大学院M2 の長野県の小学校の先生からの報告があった。ICT の活用を学校内に広げる取り組みが研究テーマであ った。地域によって学校によって、また先生方個人 個人によって、ICT 活用には大きな差があり、学校 全体としてなかなか進まないことに悩んでおられた。 子どもの学びと同様、先生方も自ら「学びたい」「使 いたい」という気持ちになることが必要である。ICT というハードルを少しでも低くするため「サポート センター開設」と銘打って、困ったときにいつでも 「笑顔で即対応」しますよと持ち掛けたところ、徐々 に行内での ICT 活用が広がりつつあるという実践で あった。最後に附属特別支援学校の先生から『環境 を整える』というテーマでの報告があった。初任校 での出来事から、そのような出来事が起こる環境を つくってしまった自分の責任を感じ、思い出しては 初心忘るべからずと肝に銘じているという。何度か お話の途中で、「もしも自分だったらこの時どうし ましたか?」という問いかけがあった。それぞれが 自分の経験とも重ね合わせながら答え、身が引き締 まるような思いがした。教師はついつい熱くなって、 感情的になることがあるが、その時の子どもの気持 ちになってみると、決して子どものためになってい るとは限らない。特別支援学校に勤務して、「子ど もの興味・関心や願い、伸びている力に目を向け、 環境を整える」ことに気づくようになったとの報告 であった。「子どもに寄り添い、子どもを見とる」 という考え方も、昨年、福井大学で初めて聞いた言 葉だった。このことについて、私自身も子どもの見 方が変わったなと思うことがあり、思わず口に出た。 いつもラウンドテーブルでは、それぞれの報告を自 分の問題として捉え、自分ならどうしていくのだろ うと考える時間が生まれる。そうして一人で悩んで いることも、同じテーブルで知恵を出し合って解決 していこうとする不思議な時間を共有する。その日、 同じテーブルになったご縁のある人たちと、お互い に気持ちを通わせパワーをもらいながら、これから も繋がっていくんだという不思議な感動を味わい刺 激や興奮をもたらしてくれる。その不思議な時間を 持ち帰って、私も初心に戻って今日の学びを忘れな いようにしたいと思う。

信州という土地柄のためか、それとも非日常の体験を通してなのか、この2日間を振り返り、

「Sustainability」という言葉が頭に浮かんだ。夏の集中講座で読んだ「学習する組織」のレポートのタイトルだった。サブタイトルには「しなやかな変化と守ろうとするものとの調和~誰もが幸せに生きてい

くために」と書いた。長野県に限らず私たちの日々の教育活動は、先人たちの優れた伝統を大切に引き継ぎながらも、将来を見据えた新しい取り組みに挑戦しようとすることとの調和が大切だと感じた。地球上で起こるあらゆる問題に適切に対応しようとする組織や企業も、学校という組織も共通している。誰もが幸せに生きていくための取り組みである。信州の地に立って改めて思い返すこととなった。信州ラウンドレポートを書いていると、うまくまとめられず、ニュースレターに投稿するにはだらだら

と拙い長文になってしまい申し訳ありません。

最後に、私が今、福井大学教職大学院で学ばせて 頂いていることだけでも、私にとっては奇跡的な出 来事なのですが、さらにこのような一期一会の奇跡 的な出会いとなる機会を与えていただいたことに、 心より感謝いたします。ありがとうございました。

長崎ラウンドテーブル報告

長崎ラウンドテーブル 2017 報告 「教育実践研究フォーラム in 長崎大学」

「ただいま!九州!」。長崎駅に到着後、最初に大きく深呼吸しながら、こころの中でつぶやいた。私は、今年の3月まで福岡に住んでいた(しかも11年間!)ということや親戚が大分の竹田や長崎の諫早に住んでいることもあり、九州は私にとっての第二の故郷である。そんな嬉しさや懐かしさを感じながらの長崎入りだった。

2017年(平成29年)11月11日(土)と12日(日)の2日間、長崎大学文教キャンパス教育学部教育工学実験教室(SCS教室)・11番教室他にて、「教育実践研究フォーラムin長崎」が開催された。日程は、以下のとおりである;

11月11日(土) 実践研究 長崎ラウンドテーブル: 13:00-16:30 ラウンドテーブル

11 月 12 日 (日) 教育実践と省察のコミュニティ 2017:

9:00-12:40 実践研究・ポスター発表 13:30-16:00 シンポジウム

福井大学教職大学院 特命助教 花井 涉

11日(土)のラウンドテーブルには、126名の参加者が約8名ずつのグループ(14~15 グループ)に分かれ、各グループ2名の実践報告を聴き、実践の展開を共に探求し合うセッションが開かれた。

私がファシリテーターを務めさせていただいたグループは、2名の報告者(現職教員と現職院生)、1名の県教育センター研修員と4名の院生(長崎大学院生)という多様な学校種、年代や専門を背景にもった先生方によって構成されていた。

まず、長崎大学附属中学校の先生より、勤務校における情報モラル教育の現状(事例)、学校での対応、家庭・関係機関との連携や課題等についてのご報告をいただいた。情報モラル教育は、近年の急速な情報化社会や情報リテラシー(正しい情報を取捨選択し、適切に理解する力等)の育成の必要性が高まっているなか、非常にタイムリーなトピックであった。インターネットやスマートフォンの普及により、現代の子どもにとっては、生活の重要な一部であると同時に、なくてはならないものになっているといえる。報告者の先生からは、附属中学校における情報モラル教育として、道徳の時間に「メールっ

て・・・?友達って?」(『大人の知らないネット いじめの真実』ミネルヴァ書房)を資料とし、現代 における友達関係のより良いあり方について考える 取り組みや LINE が開発した教材(企業の教材)『「楽 しいコミュニケーション」を考えよう』を活用し、 友達とネットの付き合い方やコミュニケーションの 考え方を共有し、活用の仕方を考える取り組みを行 なっていた。また、学校の対応としては、生徒指導 面で携帯電話等の取り扱いについて、家庭における ネット環境に関するアンケート調査を実施したり、 学校としての方針を決めたりといった対応を行なっ ているとの報告をいただいた。グループ内の話し合 いでは、多様な家庭環境から携帯電話を禁止するこ とは難しいだろうという点やうまく付き合っていく 方法を模索する必要性、そのために継続的な情報モ ラル教育の推進が重要になるだろうとの意見が出さ れた。

次に、現職院生の先生からは、県内の高校におけるキャリア教育の実践と生徒へのアンケート調査を通じて明らかになった点についてのご報告をいただいた。近年、キャリア教育は、社会的・職業的自立や社会・職業への円滑な移行に必要な力を育成する上で、非常に重要な実践となっているといえる。しかし、ご報告からは、学校内における教員間での生徒のキャリア教育や進路選択に関する共通認識がま

だ進んでおらず、対応がバラバラになってしまうという課題があげられた。アンケート調査からは、高校2年生は進路に対する関心や意欲が低くなる傾向にあるが、3年生はより現実的に進路を考えており、その進路選択に必要な学習をどのように促進するのかが課題としてあげられた。世代、学校種や地域を超えた傾聴、議論や省察ができ、私を含め、福井大学教職大学院の院生の皆さんにとっても良い刺激や学びを得ることができたRTであった。

今回の長崎 RT は、私にとっても初めての RT であり、ファシリテーターとして先生方の日々の実践を聴き、聴き手からの意見や考えを引き出すことや時間配分の難しさを痛感させられた。その点で、私のグループの先生方にはご迷惑をおかけしてしまったが、同時にこの長崎 RT 全体を通じて、長崎の先生方も日々試行錯誤や省察を繰り返しながら授業づくりをされており、日頃の実践を熱く語り合う様子やものすごいエネルギーやパワーを感じることができ、大変嬉しく感じた。

最後になりましたが、この長崎ラウンドテーブルの準備にご尽力いただきました、長崎大学の藤井佑介准教授を始め、教育学部の先生方、長崎大学教職大学院の院生の皆様、RTでご報告いただきました皆様に感謝申し上げます。

長崎ラウンドテーブルに参加して

教職専門性開発コース 2 年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程 中山 詩菜

風がだんだん冷たくなってきた 11 月の半ば、初めて長崎大学教職大学院主催のラウンドテーブルに参加させていただきました。長崎大学教職大学院は、子ども理解・特別支援教育実践コース、学級経営・授業実践開発コース、教科授業実践コースといった 3 つのコースに分かれています。ストレートマスターは、講義形式の授業を受けたり、短期間公立と附属の両方で実習に取り組むそうです。研究方法も福井のやり方とは異なっており、それぞれの課題に適した理論を用いて実践し、アンケート調査、テスト等

を基に分析し、結果を出す、という科学的研究に近い取り組みという印象を受けました。福井大学の取り組みを改めて考え、その意義を感じると共に、発信することができた2日間でした。1日目の報告会では、長崎大学の教授とストレートマスターの院生(M1)、長崎県の教育委員会の方、NPOの代表の方とお話しし、2日目は、ストレートマスターを含めたM2, M3の院生、長崎大学附属の先生、長崎大学の先生方のポスターセッションに参加しました。特にポスターセッションでは、英語科の先生の発表を中心

に聞くことができる貴重な機会となりました。報告会の後に開かれた懇親会で、長崎大学のある先生が、「人と出会うチャンスはあるけど、大事なのは、自分にとって(成長するための)価値のある人とどれだけ出会えるかだと思うんだよね」とおっしゃっていました。この一言と、今回の長崎ラウンドテーブルは、私が今まで経験してきた「出会い」について改めて考えるきっかけをくれたので、それについても書きたいと思います。

よく、「色々なところへ出かけて自分の知見を広げたほうがいいよ」と言われます。しかし、自分のいまある環境から抜け出ることは、負荷がかかることだと思います。初めて会う人たちの前で失敗したり、恥をかいたりするかもしれないという怖さもあるし、福井の学びで十分だし、なんとなく億劫だし、そもそも、県外に出る前に自分のことをするのが先でしょ、そもそも視野を広げる必要もないでしょう。様々な行かない理由が浮かぶのに、なぜ周りは「ぜひ積極的に参加してください」と言うのでしょうか。幅広い視野を持つことは、なぜ大切なのでしょうか。

色々な考えがあると思いますが、私は、人との出会いを通して経験が増えると同時に、言葉が増えると考えています。言葉は、自分の思いを表現する方法のひとつです。同じ日本人でも、みんな同じようなしゃべり方をするわけではありません。今まで経験したことと、それに基づいた自分の気持ちを伝える方法が、皆それぞれ違います。「なんか~」、「をうだよが、皆ぞれぞれ違います。「なんか~」、「するほど」「そうだよね」といったあいづち、「探究」、「実践」、「ココートのよく使われる単語をよく使って話す、等々。ほぼ無意識に使っているとまで出会った。ほな、私たちは、自分の会まで出会った言葉や経験を基に、自分の気持ちを伝える手段を選びます。自分の経験値が増え、言葉

の選択肢が増えることで、その人が納得するような 声掛けの選択肢が広がったり、子どもたち一人ひと りが成長するきっかけを与えたりすることができる のかな、と思います。

また、出会いや対話を通して、自分が「なんとなく」でやってきていたことが明文化されたり、常識が変わったりすることもあります。東京ラウンドテーブルでは、福井の当たり前は当たり前ではないということ、自分の取り組みすら十分に説明できない自分がいると気づくことができました。福井の国際ラウンドテーブルでは、英語というフィルターを通して考えることにも挑戦させて頂きました。言語を学ぶとつながれる人の数がぐんと広がり、英語だからこそ伝えられるニュアンスの面白さがありました。

しかし、出会うだけではただの広がりしか生まれないということも、最近感じています。それが、長崎の懇親会で先生が仰っていた「価値のある出会い」をどれくらいつかめるかということなのだと思います。とある雑誌に書いてあったことですが、視野を広げることで、新しいアイディアが生まれ、次第に問題意識をもつようになり、その分野の優れた人に必然的に目が向くようになるそうです。今後は教育に携わる人たちはもちろんですが、教育とは全く違う世界で生きている人たちとも関わりたいと考えています。自分が新しい風となって先生方に刺激を与えたり、もらったりできるような存在を目指していきたいです。それによって、学校現場だけではなく、教育業界全体の活性化につながると嬉しいです。

このような学びの機会を頂くことができたのも、 教職大学院の先生方、院生の皆、長崎で出会った方々 のおかげです。感性を磨ける出会いに、今日も感謝 したいと思います。最後まで読んでいただき、あり がとうございます。

「教育実践フォーラム in 長崎大学」の余白と行間

奈良女子大学・教育システム研究開発センター 鮫島 京一

「植えてみよ花のそだたぬ里はなし こころからこ そ身はいやしけれ」――良寛の一首である。多義的 な解釈がなされているが、大別すれば、「種を植え てみればどこでも花は咲くのだから、心をこめることなのだ」と「花がそうであるように、どんなところでも楽しい場所になる。だから、試みることだ」

である。「花」をラウンドテーブルの精神に、「里」 をそれを受容している場になぞらえると、なかなか 興味深いところがある。

なぜこんなことを書くのか。一つには、私自身が、 2011 年に福井大学のラウンドテーブルと出会い、 2013 年より奈良でラウンドテーブルをはじめ、来年 4月から福井大学・岐阜聖徳学園大学・奈良女子大学の連合による教職大学院の設置へと歩みをすすめてきたことがある。しかし、それ以上に、今年で3年目となる「教育実践フォーラム in 長崎大学」に外見上おちいっているかに見える「断片性」のなかに貫かれている一本の強固な教育実践研究の論理と、それをつらぬきとおそうとするやはりひとすじの粘り強さに感嘆させられたからである。

本フォーラムの特徴は3点にあると受けとめている。第一に、大学院生による実践研究の成果発表の場である。第二に、大学と附属学校園との協働による実践研究の成果報告の場である。そして第三に、これがひとすじの粘り強さとなるのであるが、教育実践に関する課題とその研究に取り組もうとする意志である。第三については、なんだ、そんなことかと思われるかもしれないが、ことはそう簡単ではない。そのあたりのことを書いておこう。

第一、第二の特徴に共通するのは教育実践研究の 論理である。長崎大学の場合、教科教育が中心となっていることである。教師は学習指導を通じて児 童・生徒に働きかけていく。世の中には、さまざまな学習活動があるのだが、授業というのは学習指導 の中心である。そのため、授業研究が大事だという ことになる。そのとおりである。このことを大事に されていることがよくわかった。

その一方で、いま、授業研究の質的な転換が求められているのも事実である。「授業」から「学習」へ、「知識の伝達者」から「学習活動のデザイナー」へと、学習観や教師像の転換が求められている。福井大学の場合は、学習観・教師像の質的転換を通じた授業研究の刷新を試みているように受けとめているが、長崎大学の場合、教科教育を土台とする授業研究を充実させながら、学習観・教師像の質的転換を試みているように観じた。

こうしてみれば学習観・授業観の質的転換を促す 教育実践研究には、二つの流れがあるのかもしれな い。しかしながら、そう簡単に分けては相互に浸透 するもの、手を結び合っているものが見失われる。 第三の特徴、「ひとすじの粘り強さ」である。この 二つの流れが同じ源泉から発し、本質的には同じ社 会的・教育的現実を相手にしているという事実の大 事な側面が見失われてしまう。それではどちらの流 れの意味をも見ることができないであろう。

冒頭に、本フォーラムについて「断片性」という 言葉で表現した。それは、本フォーラムの端々に垣間見られた、長崎大学が追究している教育実践研究 における苦労と苦心である。具体的には、ラウンド テーブルを初日に設定すること、ポスターセッショ ンへの院生の構えをつくることはもとより実践の言 語化を促すために発表要録集を作成していることな どである。

こうした一つ一つの工夫や苦心に大いに学びつつも、他方で、ラウンドテーブルの精神と教科教育を中心とする授業研究との「相克」を感じた。それが「断片性」という言葉を使う理由である。一例をあげるならば、ポスターセッション後の「総括」の進め方である。登壇者がポスターについてコメントするという進め方は、従来の研究会や学会と同じようなやり方ではなかったか。実践の意味づけをするのであれば、参加者をその場でいくつかのテーブルにわけて、自らが聴いたポスターセッションについて語り合う場の方がよかったのではなかろうか。こうした「相克」によって、「フォーラム」としてのまとまりが弱くなっていたように私には思われた。

もちろん、そこには、それぞれの大学の教職大学院へと至る過程の違いがあるのだろうし、教育実践研究についての知的遺産や伝統の違いもある。長崎大学が「ラウンドテーブル」ではなく「フォーラム」という言葉を掲げているあたりの事情があるのだろう。このようなことを大事にしながら新しい試みを展開するわけであるから、企画に携われた先生方のなみなみならぬ苦労や苦心がある。それゆえに、私であればどのように構成するのだろうか、という実践的な問いに直面し続けた2日間であった。「ひとすじの粘り強さに感嘆させられた」と書くのは、こういうことなのである。

さて、長崎大学の「フォーラム」の試みから学び とったことを、連合教職大学院となる奈良女子大 学はどう活かすのであろうか。それは、長崎大学が示してくれているように、奈良女子大学の「強み」(あるいは知的遺産)を語り直すことであると考える。奈良女子大学は、非教員養成系の大学であり、人間のもつ自主性・自発性への信頼に基づいた学習活動を通じて自立を促していくというのが、女高師以来の教育思想である。この「強み」を活かすならば、学習観・教師像の質的転換と、自主と自立の教育思想に基づいた授業研究の質的転換を統一的に実現する教師教育を展開する必要があると考える。福井と長崎の折衷のように見え

るかもしれないが、そんなことは取るにたらないことである。奈良女子大学ならびに附属学校園が、大正自由教育の教育思想を21世紀にふさわしいかたちで創造し直すためには、こうした方向を取る必要があると考える。そしてこの方向にすすむことができるように背中を守ってくれているのが、長崎大学と福井大学の試みなのだと思われるのだ。「植えてみよ…」である。

世界授業研究学会(WALS)LSIP 福井プログラム報告

WALS2017 福井プログラムについて

その意義と役割

福井大学教職大学院 准教授 半原 芳子

2017年11月27日~28日にかけてWALS2017福井 プログラム (Lesson Study Immersion Program: 以 下、LSIPと記載)が開催された。本プログラムは 世界授業研究学会 (The World Association of Lesson Studies International Conference: 以下、 WALS と記載)の年に1度の研究大会が今年度名古 屋大学で開催される運びとなり、そのポストプログ ラムとして福井県教育委員会と福井大学教職大学 院が共催で行ったものである。名古屋大学で行われ た WALS 国際大会には35の国や地域から800名を超 える参加があり、うち LSIP にはドイツ、シンガポ ール、香港、スイス、アメリカ、ブルネイ、インド ネシア、スウェーデン、イギリス、デンマーク、ノ ルウェー、オランダ、フィリピン、中国、台湾、ア イルランドから約100名が参加した。また、本プロ グラムには協力助言者として東京大学大学院の秋 田喜代美先生、国立教育政策研究所の千々布敏弥先 生、玉川大学の石井恭子先生、WALS のピーター・ ダドリー会長、クリスティーン・リー副会長、そし て WALS の委員であり初代会長の高寶玉先生が参加 くださった。

多様な参加と幾重もの価値を持った LSIP 1 日目

LSIP1 日目は、参加者が 4 つのコース (A コース: 福井市明新小学校、B コース:福井大学教育学部附 属義務教育学校、C コース: 坂井市立丸岡南中学校、 D コース:福井県立若狭高等学校) に分かれ、授業 見学およびその後に行われた授業研究会に立ち会 うという内容であった。それぞれのコースの内容と 当日の様子の詳細は各担当者の報告に委ねるが、参 加者は英語の通訳を通じ、授業の展開や子どもの学 びの様子を詳細に知ることが可能であった。また、 授業後の授業研究会では、授業者の先生から語られ る思いや信念、そしてその時々に行った判断に触れ ることができた。そして、授業を参観していた異な る教科・世代の先生方が、その授業者の思いを汲み 取りながら丁寧に議論・検討を進める様子を見るこ とができた。参加者は授業参観時においても子ども 達の協働や探究を目指す授業に驚いた様子であっ たが、それにも増して授業研究会の様子に大きな刺 激と感銘を受けたようであった。当日明新小学校と 若狭高校は本プログラムのために公開授業ならび に授業研究会を企画・実施してくださり、 附属義務 教育学校は今年度義務教育学校となって初の公開 研究会として本プログラムを位置づけてくださっ た。また、丸岡南中学校は当日指導主事訪問日であ り、滅多にない貴重な場に立ち会わせていただいた。 それぞれの学校の協力のおかげで、多様な参加と幾 重もの価値を持った初日となった。

新しい時代の教育改革に向けグローバルコミュニティ が編まれた LSIP 2 日目

LSIP2 日目は、午前は福井県教育総合研究所にて、前半は「WALS ×DPDT SPECIAL SESSIONS & REFLECTION」と題して、福井大学教職大学院から次世代の教育改革に向けた新たな授業研究の提起と、その提起を踏まえた意見交換をシンポジウム形式で行った。そこでは協力助言者の先生方から貴重な意見をいただくことができた。後半はシンポジウムの話題提起を受け、コースをまたいだ参加者主体の小グループでのクロスセッションを行った。クロスセッションでは、自分達の国や地域、学校における現状が率直に語られるとともに、より良い授業および授業研究会を自分達の場でどのように実現できるかが検討されていた。私が入ったグループでは、同僚との関係性、教育制度、教員養成・研修のあり方などを射程に入れながら、異なる国・校種・世代

の先生方 6名が熱心に意見を交わしていた。隣のグループでは、カリキュラムや評価といった観点からの話し合いが行われており、またあるグループでは実践記録の意義が検討されていた。世界の教育者100名以上が国や地域を超え、言語(英語)を駆使しながら自分達の実践の状況を表現し、分かち合い、その意味を問い、そして次の展望を拓いていこうとする姿勢に頭が下がる思いであると同時に、運営側としてこの場(本プログラム)の意義を強く実感した。午前のプログラムが終わった後、「LSIP に参加して良かった」と感想を伝えに来てくれる参加者もいた。午後は、この時期にはめずらしい澄みきった秋晴れのもと、参加者達は福井県内の教育文化施設の見学へと向かっていった。

末尾となるが、福井市明新小学校、福井大学教育学部附属義務教育学校、坂井市立丸岡南中学校、福井県立若狭高等学校、そして協力助言者の先生方に心から御礼を申し上げるとともに、福井県教育委員会ならびに WALS2017 実行委員会の皆さんと共に LSIPの無事の終了を喜びたい。

福井市明新小学校訪問報告 公立学校での学び合う教員コミュニティ

福井大学教職大学院 特命助教 花井 涉

11 月末の福井にしてはめずらしく晴れた 27 日の 月曜日、世界授業研究学会(The World Association of Lesson Studies、以下: WALS)のメンバー27 名(Peter Dudley 会長、Jean Lang 事務局長及び WALS 一般会員)、国立教育政策研究所の千々布敏 弥先生、福井大学教職大学院スタッフ 2 名、県教委 から 2 名、福井大学留学生 1 名、JICA 研修生 2 名 と JICA 通訳 1 名他、計 36 名で福井市明新小学校を 訪問し、研究授業を参観した。

当日は、まず明新小学校と丸岡南中学校を訪問予定のWALSメンバーが福井県教育総合研究所に集い、各校への訪問を前に福井県の教育に関する説明会と訪問直前の打ち合わせが行なわれた。まず、「ふくいの教育」DVDを観た後、千々布先生より、「福井県の教育」についてレクチャーをしていただいた。特に、先生ご自身のこれまでの研究に基づき、福井県や秋田県における学力が高い要因、福井における学校文化、授業研究の質の高さやタイム・マネジメ

ントの重要性についてお話いただいた。DVD鑑賞及び千々布先生のレクチャーを通じて、WALSメンバーも各学校訪問の前に福井における教育、学校文化や授業研究についてのイメージができ、大変有意義なプログラムとなった。

その後、WALSメンバーは各学校にバスで移動し、36名が明新小学校に到着した。到着後、4校時の授業(29クラス)が一斉に公開され、WALSメンバーはフリーの授業参観を行なった。Dudley会長やLang事務局長は、すべてクラスを順にまわり、ときおり生徒に声をかけながら授業を参観されていた。昼食後、WALSのメンバーは、カメラやiPadを手に、生徒たちの清掃活動を参観した。WALSメンバーからは、明新小学校の清掃活動が時間どおりにしっかり行なわれていた点や清掃活動後に行なわれる反省会に大変多くの関心が寄せられた。

清掃活動参観後、WALSメンバーは、松田和之先生による社会科(第4学年4組)の研究授業を参観

した。社会科の授業は、「県の様子」をテーマに、 福井県における多様な産業の理解と県外から来られ た人に福井県の産業を紹介するとすれば何を一番紹 介したいかについて、生徒たちが考える授業内容で あった。WALSメンバーも松田先生の授業を通じて、 福井県の豊かな産業を知ることができ、学びの多い 研究授業であった。

その後、WALSメンバーは、研究授業を参観された明新小学校の先生方が4つのグループに分かれ、世代や教職年数を超えて授業について議論する研究協議会を参観した。研究協議会後には、授業者である松田先生に残っていただき、WALSメンバーから直接質問する時間が設けられた。そこでWALSメンバーからは、研究授業で松田先生が生徒と大変良好な関係を築いており、授業の雰囲気が非常に和やか

であったという意見が出された一方で、先生が福井県の産業、名産や観光地等に関して事前に準備していた写真(電子機器)の使い方についての指摘もなされ、大変活発な意見交換会となった。

今回の明新小学校への訪問を通して、WALSのメンバーは、ごく一般的な公立小学校においても研究授業や研究協議会が行なわれており、それを通じて教師の授業力を向上し、生徒の学びを深めている様子を参観することができ、福井における授業研究や学び合う教員コミュニティの一端を垣間みることができたのではないかと思う。最後に、今回LSIPでのWALSメンバーの授業参観を快く受け入れていただきました明新小学校の北川校長、中野教頭先生、授業を公開いただいた松田先生を始め、明新小学校の先生方に感謝申し上げます。

福井大学教育学部附属義務教育学校 訪問報告 子どもと教師の学び合うコミュニティを支える組織

福井大学教職大学院 准教授 岸野麻衣

福井大学教育学部附属義務教育学校へは、WALS (World Association of Lesson Studies; 世界授業研究学会)会員29名、副会長でもある東京大学の秋田喜代美先生、福井大学スタッフ4名、福井県教育総合研究所スタッフ2名が訪問し、授業の参観を行ったあと、質疑応答やグループでの振り返りが行われた。当日は、公開研究会の日でもあったため、福井県内外から多くの教育関係者も参加しており、日本の授業研究会の様子を参観したり、学校のこれまでの研究や生徒の取組の発表が行われる全体会にも参加したりすることが可能となった。

朝9時から授業公開が設定されていたため、参加者は朝から学校へ来て、さっそく参観に入った。公開授業は、3つの時間帯で設定されており、学校のすべてのクラスですべての教科の授業が公開されていた。授業内容や授業でのやり取りの通訳の都合上、参加者の関心が高く、また言語に関わらず理解しやすい、理数を中心に案内した。1つ目の時間帯は前期課程の理科、3つ目の時間帯は後期課程の数学へ案内し、2つ目の時間帯はフリーとした。フリーの時間帯は英語を参観した参加者が多かったようである。英語科では、授業の中で参加者と子どもが英語でやり取りする場面も見られた。



参観後、参加者からの質疑応答とグループでの振り返りが行われた。参加者からは、附属義務教育学校での授業研究のやり方や大学との連携などについて質問が相次ぎ、附属義務教育学校に長年かかわっている秋田喜代美先生と、福井大学のスタッフから説明を行った。全体でのやり取りのあとには、4グループにわかれて疑問や感想を出し合い、濃密なやり取りが行われた。

主題・探究型の授業を目指して、研究テーマのもと、教科を越えたグループを編成して時間割に時間を確保して授業研究を行っていること、実践記録を全員が書き、読み合いながら検討しあっていくこと、大学から研究の企画を行う会議に毎週参加してい

たり教科ごとに授業づくり等の研究会に参加した りしていることなど、学び合うコミュニティを支え る組織の在り方が語られた。

グループ協議のあと、同時間帯に行われていた、日本の一般参加者が教科ごとに行っていた授業参観後の協議会を見学に行き、その後全体会へ参加した。全体会では、これまでの研究の歩みや、当日の協議会についての報告がなされた。また、OECDのイノベーション・スクール・ネットワークにも参加していることから、8月に東京で行われた国際フォーラムでの様子を生徒が英語と日本語で報告する時間も設定されていた。全体会の最後には、秋田喜代美先生から全体助言が行われ、生徒の学ぶ姿や参観者の取っていた参観記録をもとに、子どもと教師の学びについてコメントいただいた。公開研究会が教師のためだけでなく、生徒も全体会に登場し、生

徒も主体となって学びを語る意味についても言及 された。

最後に、帰りのバスまでの時間、副校長の牧田秀昭先生と3つ目の時間帯で参観させていただいた数学科の柳本一休先生を囲んで、質疑応答が行われた。学校経営や授業づくりをめぐって話が尽きることなく、充実した時間を過ごすことができた。



坂井市立丸岡南中学校訪問報告 特色ある学習環境を活かした教員の学び

世界授業研究学会(WALS)2017 福井プログラム学校訪問における、坂井市立丸岡南中学校の様子を報告する。当日はWALS初代会長である香港教育大学准教授 Ko Po Yuk 先生、WALS参加者20名、JICA研修生5名、JICA研修管理員1名、福井大学教員研修留学生1名、県教育委員会2名、教職大学院スタッフ2名の計32名が、丸岡南中学校に訪れた。当日のスケジュールは表1の通り。

表 1. スケジュール

X1. /// • = //	
時間	概要
11:50 -	授業参観(フリー参観)
12:40	
12:40 -	昼食(弁当)
13:25	
13:30 -	学校概要説明
13:45	
13:50 -	研究授業参観(社会・国語・理科)
14:40	
14:50 -	研究協議会参観
15:40	
16:00 -	授業者・WALS メンバーでの意見交
16:40	換

福井大学教職大学院 講師 高阪将人

フリーの授業参観においては、各参加者がそれぞれの興味・関心に基づき校内及び授業を見学した。 丸岡南中学校の特色である、教科センター方式に関心を持つ参加者が多く、教科特有の内容を身近に感じることができるメディアセンターを賞賛する声が聞かれた。また、参加者の多くが数学の授業に興味を持っていることを知り、林先生が急遽テスト対策から通常授業へと変更して下さったこともあり、それぞれの参加者が希望通りの授業を参観することができた。



学校の概要説明の様子

学校の概要説明では、月僧研究主任から校訓や丸 岡南中学校の特色、研究実施体制、付箋を用いた研 究授業の実施方法について説明が行なわれた。参加 者の興味・関心は研究実施体制や研究授業の実施方 法にあったように思う。

研究授業参観では、参加者の興味・関心に応じて、社会・国語・理科の3つに分かれた。社会では「アフリカ州―特定の生産品にたよる生活からの変化―」、国語では「学力向上委員会通信の増刊号を書こう―説得力のある文章を書く―」、理科では「音の世界」について授業が行なわれた。その後、各授業における研究協議会を参観することとなった。



数学の授業の様子

各参加者は、研究授業及び研究協議会では発言する機会が無かったため、授業者・WALSメンバーでの意見交換では活発な議論が行われた。WALS初代会長のKo Po Yuk 先生からは、「研究授業及び研究協議会を参観し、各参加者が発言したいと思う気持ちを抱いていたことが、授業研究のスタートである。」というコメントがあり、授業研究の形式ではなく本質について考える良い機会となった。



社会科の研究協議会の様子

福井県立若狭高等学校訪問報告 若手教員授業力向上塾から見た教師の学び合い

11月27日の午前、WALS 会員32人+JICAメンバー6人+外国教員研修生4人+教職大学院スタッフ3人+県教育庁2人、合計47人が穏やかな天気に恵まれて、青空の下に三方五湖エリアを通過し、若狭高校に到着した。到着後、校長先生から学校の取り組みの紹介があり、その後自由に授業参観をした。全校27クラスの授業がすべて公開され、LSIP参加者が自由に参観したい授業を選び、三人の通訳が学年ごとのフロアーに待機して随時対応した。お昼は、参観者が各教室で学生と一緒に雑談しながら食べた。各グループ内、話が弾んで会話に夢中してお弁当があまり進まず、笑いが止まらなかった。

福井大学教職大学院 特命助教 王 林鋒

写真①: 若手教員授業力向上塾の様子



午後の研究授業は、渡辺先生より国際探究科 3 年生の古典『童子問』であった。典型的な『THE 渡 辺スタイル』で、少ない指示を無言で黒板に書いた り、教室外の廊下で「寺子屋」形式で個人指導をし たりユニークな授業が行われた。参観者から

"Dramatic"と驚嘆した声も聞こえた。さらに授業後、参観者が自由に学生に質問したり、インタビュ

ーしたりすることができた。事後協議会は、『若手 教員授業力向上塾』の10人の先生が、二つのグル ープに分かれ行われた。

その後、若手教員及びベテラン教員との質疑応答 の時間が設けられた。セッションは、10人の先生 の自己紹介から始まった。意外なのは、全員英語で 自分の名前、教科、教職年数を言っていたことであ った。教員同士も初めてお互いの英語を聞いたそう である。主に出た質問は、「他教科の授業を見る時、 どういう視点で見るか?自分にとって、何を得た か?」、「なぜ渡辺授業スタイルを行うことができ ないのか?」、「新人教員は、自分のアイデアを今 の学校に持ち込んで実践するか、それとも自分が学 校に馴染むのか?」、「この取り込みの初期段階で は、どのような課題やチャレンジがあったか?それ らに対して、どのように乗り越えたか?」、「積極 性のない教員をどのように説得するか?」、「この 取り込みの効果に、何か根拠はあるか?」、「教員 の成長や、学習者の学びに寄与しているか?根拠は

どこにあるか?」であり、活発な意見交換ができ、 大変有意義だった。

写真②:LSIP+WAKASA 質疑応答



WALS×DPDT 特別セッション報告

省察的授業研究と専門職として学び合うコミュニティ

福井大学教職大学院 准教授 岸野麻衣

11 月 28 日,福井県教育総合研究所において、WALS (World Association of Lesson Studies;世界授業研究学会) と DPDT (Department of Professional Development of Teachers, University of Fukui;福井大学教職大学院)のコラボレーションによる特別セッションが行われた。

はじめに参加者が一堂に会し、オープニングセレモニーとして、WALS、DPDT、福井県教育委員会から挨拶が行われた。その後、明新小学校・丸岡南中学校を訪問した参加者と、附属義務教育学校・若狭高校を訪問した参加者で、別々の部屋に分かれ、セッションを開始した。いずれの部屋でも、はじめに DPDT のメンバーから、前日の学校訪問での学びを振り返って提示した。

基調報告では、まず導入として次のようなことが 述べられた。いま公教育が大きな転換点にあり、コ ンテンツを注入する教育から、探究的な学習に基づいてコンピテンスを形成していく教育へ変わっていく必要があること。学習のモードは個々のアイデンティティや文化に根差しており急激な変革は難しいこと。長い道のりで、学習を転換していくプロセスを省察していく必要があること。

そして、OECD等で検討されてきているキーコンピテンシーなどを参照しつつ、コンテンツ・ベースのカリキュラムから、コンピテンシー・ベースのカリキュラムへの転換の必要性、そのためにも新しい学習に向けた授業研究と専門職として学び合うコミュニティが重要であることを指摘した。

さらに授業研究として、教師の言動をチェックする授業研究をモード1,事前の授業案の検討を中核に事後協議会もそれに基づく指摘に終わる授業研究

をモード2,子どもの学びを見取って教師が学び合 う授業研究をモード3と位置付けた。

これらに対しモード4として、長いスパンでの省察的授業研究を提案した。そこでは1時間の授業の省察にとどまらず、次の授業に向けた省察や、単元全体の省察が重要となる。さらには複数の単元が連なって展開していく中で、コンピテンシーの発達を促進していくことが意識されるのである。

取組の一例として,福井大学教育学部附属中学校 で取り組まれてきた実践を挙げ,子どもの探究的な 学習が発展していく過程を共有し,参観者も発展の 可能性を共に探るように授業を見ること,長いスパ ンで実践記録を書いて検討し合うこと,それらの年 間サイクルと組織の編み方を紹介した。

最後に、組織の在り方について、トップダウンで も「やりたいようにやりなさい」でもなく、互いの 活動や探究の文脈を新しい学校の学び合う文化へ編 みあげていくアプローチが示唆された。

これらの基調報告を踏まえて、2日間にわたる福井プログラムについて、 各教室で WALS の Peter Dudley 会長、秋田喜代美副会長、Christine Lee 前会長から意味づけをいただいた。その後のグループ協議では、学校訪問や基調報告を踏まえて、各国での取組も振り返り、活発な協議がなされた。最後のクロージングセレモニーでは、Peter Dudley 会長から挨拶いただき、盛況の中、終了となった。



書籍紹介

書評『大人の発達障害の特性を活かして自分らしく生きる』

星野仁彦著(日東書院)

星野仁彦氏の本は何冊か読んでいる。例えば『発達障害に気づかない大人たち』(祥伝社)『会社の中の発達障害』(集英社)『私は発達障害のある心療内科医』(マキノ出版)などがある。 星野氏は不注意優勢型のADHDがある大人であり心療内科医である。

今回、取り上げた本は専門書というよりは挿絵も 多く、表現も易しく書かれてあり、だれでも手に取 って気楽に読むことができる啓蒙書となっている。

そしてどの著書にも共通しているものは、根底に 自身も発達障害者として生きてきた困難さと自信、 発達障害者を見守る優しさが流れているという点で ある。

彼自身の言葉によると、彼の父親は多動・衝動 優勢型のADHDであり、母親は不注意優勢型のA

福井大学教職大学院 准教授 新井 豊吉

DHDであり、その息子である彼は三歳まで全く言葉がでておらず、軽度の発達性言語障害があったそうである。そして青年期までは吃音も残っており、人前で話すことが非常に苦手だったという。

発達障害という概念は新しいものであり、さらに大人の発達障害に関しては注目され始めたばかりである。そのため、診断に精通した医療機関も少ない。わたしが知っている発達障害を専門としているクリニックでは、受診するには二年待ちだと聞いたこともある。

子どもの診断や支援はそれなりに実践されてきているが、現在成人されている方々は、幼いころから叱られ続け、どうして自分はみんなと同じようなことができないのだろうと、自己肯定感をさげてきた人生であったことは想像に難くない。一昔前は現在

ほど、コミュニケーションを求められる時代ではな かったので、うっかり者、慌て者、風変わりな人で すんでいた人たちが目立ってきたということもある だろう。星野氏は幼いころからのエピソードを、ユ ーモアをもってちりばめながら自身が発達障害と付 き合いながらどのように成長し、自己実現をしてき たかを記している。さらにLDやASD, ADHD の特性をわかりやすく解説している。適切な支援を 受けて育ってこなかった大人はうつ病や睡眠障害、 不安障害など二次障害を併発している可能性もある。 これらの背景にある発達障害に気づくことは生きに くさ解決に一歩になると思う。

当事者として医師として書かれたこの本書は、大学 生や社会人に親近感をもって読まれ、自己理解の助 けになるだろう。

研究集会案内



For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル

spring sessions 2018 2/16(fri) 17:30-18:40 17(sat) 13:00-17:40 18(sun) 8:20-14:00

福井大学総合研究棟V (教育系1号館) 総合研究棟

探究する学びを実現する教師 教師を支える教職大学院 教師の実践力を培う学校拠点の実践研究 学校と大学/実践と研究を結ぶ 新しい実践研究組織とそのネットワーク 2018.2.16-18

> 教師教育改革コラボレーション/福井大学教職大学院 大学院教育学研究科教職開発専攻 共催 福井大学高等教育推進センター・教育実践研究フォーラム・社会教育実践研究フォーラム 後援 福井県教育委員会・福井観光コンペンションビューロー(予定)

実践研究 福井ラウンドテーブル spring sessions 2018

2/16(fri)

Pre-session 17:30-18:40 専門職学習コミュニティラの事件

2/17(sat) 13:00-17:40

orientation 13:00-13:10 学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

- A 学校:子どもたちのコミュティを支える教師のコミュティ 実践の継永を明学習指導要領を商業えたこれからの学校プパリ 教師の「有識者会議の報告を受け教師教育はどこに向かうのか:教科の専門性と教員研修の明日を問う ②これからの教員妻板を参加、大学校を通して考える・実践を聴き、夢を語る・ C コミュニティ:持続可能なコミュニティをコーディネートする ・地域の人のプルが印を支えるアプローチを開ら、出す 上 地域の人のプルが印を支えるアプローチを開ら、出す D 授業研究:子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

session I 13:10-14:10 実践に学び合う広場 実践の広がりに出会う knowledge fair

session || 14:20-15:50 課題の提起 方向性を探る symposiu

sessionⅢ 16:00-17:40 テーマ別の話し合い 問いを深める foru

18:00-18:40 省容的宝践学会准備会

2/18(sun) 8:20-14:00

SessionIV Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに830-840 ②自己紹介840-900 ③頼告 1900-1040 ④頼告 II 1040-1140 ⑤頼告 II 1220-1440 地域や職場で自分たちの実践をじってり除づけ、その音繁を志まえて実践を編み直していく、地
東場本大人用亡が実践を通して学び合う協働(に3ユニティ) に変えていく、その中で
人一人が、省客的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しず

つ蓄積されてきています。 試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

原所で加えなが、子のロク物でドウパン・エルールン・ステェ 小グループで実践の展開を聴き合います。 実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。 音葉、表情、行為。その時々に感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し 合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。 語られる展門に耳を傾け、活動の相面と共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。 実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培わ れていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

- ●申込は上記ホームページから申込書式をダウンロードし、必要事項をご記入の上、メールで送っていただく形で行います。受付期間は 1月 10 日から 2 月 15 日を予定しています。 ・②/18 の 9850mIVの実践機会を参募集しています。申込みの際にお知らせ下さい。
- ●2/18 の sessionIVの参加についてのお願い=午前午後全日程 (8:20-14:00) の参加をお願いします。 ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。 そのため 8:20-14:00 の全日程と 6 人程度の固定メンバーのパタループでの協働探究として進めます。 原則として 8:20-14:00 の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願いいたします。

Schedule

12/25 MON-27 WED 冬期集中講座(A 日程)

1/4 THU-6 SAT 冬期集中講座(B日程)

1/6 SAT 大学院説明会

1/24 SUN 長期実践研究報告書締め切り

2/4 SUN 長期実践研究報告

【編集後記】10月以降、世界授業研究学会(WALS)、LISPや JICA 研修と、海外からの教員の受け入れや RT の海外展開等、急速 に国際展開が進んでいる。福井でのこれまでの教育実践の経験が世界 に展開していくことへのワクワク感と同時に現地と福井での実践をつ なぐことへの責任も感じながら関わらせていただいている(花井)

No.105 教職大学院 Newsletter

> 2017.12.25 内報版発行 2017.12.28 公開版発行

編集・発行・印刷 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻 教職大学院 Newsletter 編集委員会 〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp